

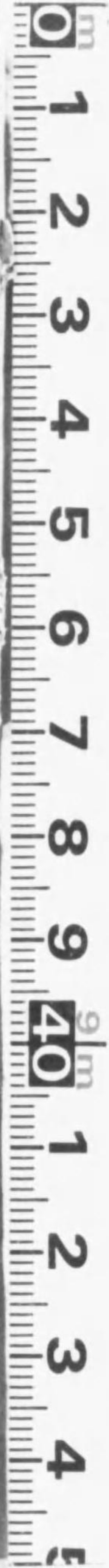
特264

トツレフンパンヨシツミ院

349

督 基 耶

著 潔 島 前



始





特 264  
349

St. Paul's Mission Pamphlet  
No. 4



耶穌基督

前島潔著



“These are written, that ye might believe that Jesus is the Christ, the son of God; and that believing ye might have life through his name.”

St. John xx 31

### はしがき

此の小著の目的は平常著者の接觸する學生及び求道者に、「耶蘇基督」の行蹟と其姿とを素描して、一讀その人格を理解せしめむとにある。我國にも既に物語的基督傳より研究的耶蘇傳に至る數十種の著譯書がある。本書は物語的或は教訓的基督傳ではないが、また近代の批評學的耶蘇傳でもない。著者の所見によれば近代の高等批評的<sup>ハイアークライシズム</sup>方法に由る耶蘇研究は、ある外部的な正確さを期し得べけんも、決して内部的な耶蘇の神髓を把握してゐない。殊に未だ基督に對する根柢知識尠き我國讀書界に、批評學的傳記を提供するは一層耶蘇の眞姿を不明瞭にする嫌がある。本書は専門家にのみ興味ある如き問題は凡て避け、歐米學者の叙述臭味より脱却して、一日本人基督教徒として認識し得たる儘



の耶蘇を描かんと努めた。然り乍ら決して近代の聖書學を否定するものではない。紛糾せる聖書史料を整理して順序を立て、年月を追うて一筋の傳紀に組みつなく事は、歐米學者の研究成果を細心に考察採用して始めて成し得る業である。唯だ著者は新説としての新鮮味以外、より強き論據なき所説は之をすて、妥當なる從來の定説に隨ふ態度をとつた。思ふに此の小篇は最初の耶蘇傳たる四福音書の前後混雜せる記事に一條の道筋を跡づけて、讀者をして直接聖書に親ましむる手引となるであらう。篇中の會話其他に邦語譯聖書の文體を其儘とゞめたのも其ための用意に出でたのである。

耶蘇基督の全貌を認識するには三つの研究方面が必要であらう。彼の神性や人性を論議する「基督論」、彼の生理事蹟を研究する「傳記」、而して彼の意識や教訓を考覈する「教説」これである。而も此の研究の三方面は互に扞格しては

ならない。基督論の結論は耶蘇傳の基調となり、耶蘇傳は其の教説に背景を供し、耶蘇の意識や教説は基督論の材料となる。若し同一人が右の三部作を著すならば、其は渾然統一して些の矛盾なく耶蘇基督を描寫證明するものでなければならぬ。著者が俄に近代研究の新説に同する能はざるも此點に存する。

著者は正統信仰オソッドノヴェルの奉教者として、常に耶蘇傳研究が正統信仰と矛盾するものに非ざる事を思ふ者である。此の小著もまた道に志す讀者に耶蘇を信するに至る便やすらとならむことを祈る。唯だ恐るゝは猶ほ事實の詮索に過ぎて敬虔の情味紙背に露はざる事である。切に研究的にして敬虔のこゝろ溢るゝ名著が日本人の筆によつて著されんことを願ふ者である。

昭和九年二月被獄日の夜



# 目次

## 第一章 耶蘇の時代……………一—三

當時の羅馬帝國——パレステナの狀況——猶太國內の諸黨派——内面的思想の概要——救主の待望

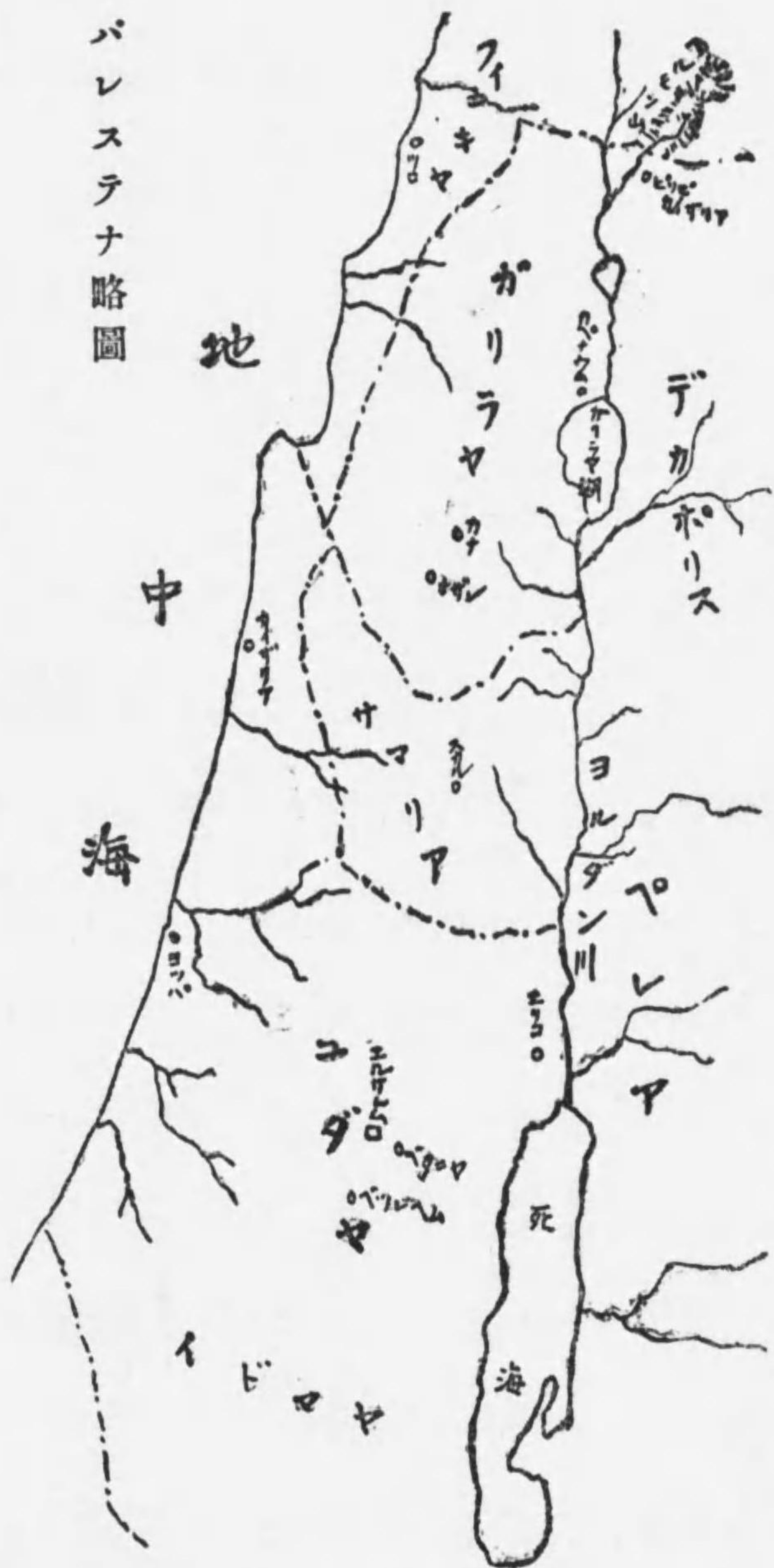
## 第二章 耶蘇の生涯……………一三—八九

- 一、降誕と幼時——降誕年代——ヨセフとマリア——ナザレ——耶蘇の幼時……………一三
- 二、受洗と試煉——ヨハネの豫言——耶蘇の受洗——荒野の試煉——勝利……………一九
- 三、故郷にて——ヨハネの證言——故郷に歸る——カナの婚姻——カベナウムにて——最初の隨從者……………二三
- 四、ユダヤにて——逾越祭に上京——神殿の潔め——ニコデモ——ヨルダンにて——耶蘇とヨハネ……………三七
- 五、イエスの姿——耶蘇の態度——平民の友——ラビとして——祈禱の生活……………三七

- 耶蘇の人間味——耶蘇の神彩……………三九
- 六、ガリラヤ傳道(活動期)——奇蹟——ヨハネの質問——十二使徒の任命——傳道旅行の掟……………三六
- 七、ガリラヤ傳道(反抗期)——五千人を養ふ——生命のパン——民衆の離反——傳道の一轉機……………四二
- 八、反對者——神權の冒瀆——パリサイ徒の思——ヘロデ黨——耶蘇の警戒……………四七
- 九、三使徒の教育——地方旅行——ピリピ・カイザリヤ——ペテロの信仰告白——變容貌……………五一
- 十、ユタヤ及ベレア傳道——エルサレムに於て——七十人の派遣——ベレア傳道——壓迫の影……………五八
- 十一、エルサレム行——ラザロの甦——猶太人の反感——エフライムへの退隱——ベタニヤにて——エルサレム入城……………六五
- 十二、受難週——反對者の謀議——三つの質問——イカカリオテのユダ——神殿にての教法……………七一
- 十三、ゲツセマネ——木曜の夕——最後 晚餐——ゲツセマネの園——血の祈禱——捕はれ……………七七



パレステナ略圖



目次

第十四、十字架——祭司長の庭——カヤバの怒——ピラトの審判——三基の十字架——母マリア……………三

十五、復活——アリマタヤのヨセフ——埋葬——日曜の朝——復活——使徒等の態度——昇天……………六

第三章 耶蘇の自覺……………九〇—一〇三

耶蘇の意識——神子の自覺——救主の意識——神僕の歌——耶蘇の教説——父なる神——自己を説く——教説の眼目——永生。

パレステナ略圖及年表……………卷頭



耶蘇とは如何なる人か。彼れ果して基督（救主）なるか。彼は如何なる使命を負うて此世に來り、如何なる行蹟を残して此世を去つたか。人の起るには起るべきの時があり、事の生ずるには生ずべきの因がある。況してや宇宙の經綸は天父の統べ給ふところ、世界の歴史は神の定むる順序に隨つて進むとすれば、我等は本題に入る前に、先づ天の攝理が耶蘇基督を地上に降したる時代を見ねばならぬ。

### 第一章 耶蘇の時代

前 島 潔 著

## 耶 蘇 基 督

### 年 表

年 代	事 件	本書記事
紀元前 5	耶蘇降誕す、ナザレに歸る。	13-16
" 4	ヘロデ大王死す(ユダヤ)	.....
紀元 26	ポンテオ・ピラト總督としてユダヤに着任。施洗者ヨハネの出現。	19-20
	耶蘇ヨハネより洗禮を受け、荒野に於て試練を受く。	21-22
	故郷に歸りて傳道を始む。	23-26
" 27	ガリラヤ傳道第一期(活動の時代)	
	春、過越節に上京、神殿を潔む。	27
	歸路ヨルダン川にて宣教、洗禮を施す。	28-29
	ガリラヤに歸る、十二使徒の選定。	36-41
" 28	ガリラヤ傳道第二期(反抗の時代)	
	過越節の頃五千人に食を與ふ。	42-43
	人々耶蘇を離れ去る。反對者現れ始む。	45-50
	夏の頃北方の大旅行、ピリピ・カイザリヤに於けるベテロの告白。變容貌。	51-58
	秋、假齋祭に上京。	58
	ペレア地方に傳道す。	60-64
" 29	ユダヤに赴き、ラザロを蘇生せしむ。	65-66
	荒野に近きエフライムに退隱。	67
	過越節前五日エルサレムに入る。(日曜日)	68-70
月曜	神殿を潔め教をなす。(日曜-水曜の夜は一二回ベタニヤに宿り他はオリーブ山にて過す)。	.....
火曜	論争の日。	71-75
水曜	寡婦のレプタ二枚を献げしこと希臘人に教法、等。	76-77
木曜	弟子達に對する告別の教、最後の晚餐、捕はれ。	78-82
金曜	裁判(午前)十字架の死(午後)埋葬(夕方)	82-87
土曜	墓の中にて。	.....
日曜	復活。	87-88
	四十日後 昇天。	89



當時羅馬は一代の英傑アウガスに依つて、從來兎角統一を缺く（オクタ）の憾ありし三頭政治若しくは共和政治は帝政と變ぜられ、治政を見ること四十五年、國勢とみに揚り、版圖大に擴がり、地中海を中に湛へて歐羅巴、亞細亞、亞弗利加の三大陸に跨り、威令の及ぶところ何百萬方里なるを知らずと言ふ有様である。試みに地圖を展（の）べて見るに、地中海の東岸南にアラビアの荒野を控へ、北シリア地方を経て小亞細亞地方に連る一小地域がある。南北の長さ約百五十哩、東西の幅約五十哩、四國より稍大なるほどの面積ながら、此の小區域こそ世界史上に最も特殊の民族的發達を遂げた猶太民族の故國で、イスラエルの選民に對する「乳と蜜との流るゝ約束の地」であつたのだ。併し紀元前すでに猶太國は獨立を失つて羅馬帝國領となり、スリア管轄區に屬して、羅馬派遣の總督の下に統治されてゐた。テペリオ・カイザル（アウガスタスの子にして紀元十四年位に即く）在位の十五年ユダヤに赴任したるポンテオ・ピラトは即ち其の一人である。斯くて基督降誕より其の公生活に入

\*ルカ傳三  
章一節

る迄の西曆紀元初頭は浸々たる羅馬の威權勢力が此の地方に日と共に重きを加へて行つた時代である。加ふるに圓形劇場に殘忍な闘技を好んで觀覽した彼等羅馬人は其の屬領地を治むるに寛容でなかつた。我等は羅馬人が誰彼の差別なくユダヤ、サマリアの被征服民を迫害した事蹟を歴史に讀むのである。聖書の記す所によれば總督ピラトも殘忍（な）な性格の人物と思はれる。彼等は是等の民を罰するに十字架の刑を用ゐた。斯かる野蠻殘忍なる刑法は猶太律法に發見し能はぬところである。

\*ルカ傳十  
三章一

苛政の下に在る者誰しも其の桎梏より脱せむ事を希はざるはない。況して猶太國民は古來唯一大能神の選民なりてふ自覺を有し、救主出現の特殊思想を抱き、之を政治的に理解して乾坤一擲世界統一の大業成るの日を待望せる民族である。彼等の或者は神の國を武力を以て來らさんと思つた。或者は機に臨み變に應じて自家萬全の道を見出して巧に世渡らんとした。或者は宗教生活の裡（うち）に隠れて世の推移を雲煙過眼視せんとした。時にまた黨を



結び一揆を起して代官總督に叛いた。チウダの徒輩もあつた。我等はいま當時猶太國內に存したる諸黨派について一瞥するも強ち無益の業ではあるまい。

サドカイ人とは猶太國の上流人士で、祭司の家門に屬する者等を謂ふのである。祭司長は彼等の占有する尊き職權である。サンヒドリン會議なるもの彼等によつて組織され、羅馬管轄下の國內に猶ほ相當の行政的權威を有つてゐたのである。彼等は所謂今日主義者に於て、機會ある毎に自家の特權と利益とを擴張する事にのみ腐心し、敢て一貫せる主義理想を有しない。宗教は彼等にとつて二義的なる方便に過ぎず、基督を處刑したのは其の教ふる所彼等の思想信仰に反したるが爲でなく、「彼を此まゝ捨ておけば人々みな彼を信ぜむ而して羅馬人來りて黨を結ぶ者となし、我等の土地と國人とを奪はん」ことを恐れたが爲である。此派に比ぶればバリサイ人はさすがに猶太教獨特の主張を固守せる宗教的黨派である。律法を守ることに頗る嚴に、彼等独自の傳統を固守して自から最高の宗教生活を營む

者と自負した。されど彼等の最高となす生活は徒らに形式に泥みて内部の生命を逸する弊が甚かつた。虚飾恰も白く塗りたる墓とは彼等に對する主イエスの評語である。自から神の律法に最も忠なりと自負して世人を侮蔑し、其の固陋、傲慢、狹量、眞に厭ふべき者であつた。またバリサイ人と並び稱せられ其の傾向頗る相似たる「學者」と稱ふる一派があつた。専ら舊約律法を研究し、會堂に於て、學校に於て、猶太教の祭司たり教師たるを以て職としたる輩で、當時に於ける宗教學者と謂うてよからう。浩瀚なるタルムツドは實に彼等の後繼者に依つて作成されたものである。

バリサイ及び學者の徒輩が政治問題に超然として自己の信する宗教生活の裡に安心を求めてゐたに反して、人民の多數はなかくに羅馬人の桎梏を甘受するに忍びなかつた。彼等は屢々黨を結び謀を構へて羅馬の羈絆を脱し、速かに神の選民たる國民的待望を實現せんと企てた。げに其頃はユダヤ、ガリラヤの全地に革命的空氣が充ちてゐた。紀元前四年



ヘロデ王の死は此の不安のガス體に火を點じた一本の燐寸であつた。エルサレムに於けるペンテコステの騒と、エリコを中心とするシモン一派の革命騒ぎ、而してガリラヤのユダがセボリスに貯藏されをる軍器を奪うて起した反亂と、之を鎮壓した羅馬人の殘虐は語るに忍びぬものがある。是等の運動はやがて潜行して熱心黨と呼ぶ一派となつた。十二使徒の一人シモン<sup>\*</sup>は即ち斯派に屬する者である。此他、猶太に羅馬總督の在住するを快からず思ひ、ヘロデ王家に加擔して此一族をしてパレステナ一圓の地を治めしめむと志す、ヘロデ黨がある。彼等が其の起源系統よりして思想流行ともに希臘文明に傾かむとするに對して波斯思想を傳ふる、エツセ、ネ宗の一派がある。特異の教理を説き禁慾生活を送つて、直接間接的からぬ影響を當時の社會に與へてゐた。斯くの如くして猶太國當時の狀勢は頗る傷心すべきものであつた。宗門黨派區々として紛糾し人民何れにか適歸すべき。斯かる時人心救主を翹望して神國の建設を思ふはまさに自然の要求である。知らず救世主は如何なる姿

<sup>\*</sup>マタイ傳  
十章四

して來りたるか。

以上は外部に現れた社會狀態のあらましであるが、次に内部に流れた宗教思想について一わたり記述の要があらう。古來猶太教の他宗教に勝れて最も特異なりし點は、神をあくまで明確に實在として強く描き出した事である。然れど長所はやがて短所である。神の客觀的方面のみ強く觀た結果、内在的の生命を缺くの憾があつた。古代に現れた預言者等は神の實在を我がうちに深く體得して此の弊に陥らなかつたが、基督降誕時代の形式的宗教に於ては、神は超越的概念となり其の姿は遠く彼方の天空に去つた。地上を支配する者は神自身にあらずして、神の律法となつた。斯くて舊約に存する律法の書は猶太教の唯一最高の權威となり、律法に遵<sup>したが</sup>ふは神民の義務なり、此の義務を果すは善にして、聽<sup>き</sup>て神に對する最上の敬虔なりと教へらるゝに至つた。今や猶太教は往昔の血と命の脈打つ宗教よ



り戒律に囚はれたる道德教と墮して了つた。人の救はるゝは信仰にあらずして律法的行爲を積むか否かに懸つてゐる。されば先づ宗教生活を送るには全律法を知悉しなければならぬ。茲に律法研究を職責としたパリサイ人學者の徒が、己れこそ最も宗教的最高生活を營む者と思惟した理由が存する。而して彼等は他の猶太人に對して倨傲自から驕つた如く、猶太人はまた異邦人に對して我等ひとり神の民なりと自負してゐた。彼等は神に對する本來の宗教的生命を失ひつゝも、國民的特權が自家にのみ與へられるものと誤想してゐた。「我等の先祖にアブラハムあり」とは彼等の誇であるが、「神はよく此石をもアブラハムの裔となし給ふ」ことを知らなかつたのである。斯く猶太教は豫言者時代の信仰を失つて弊害百出してゐた。知らず猶太の宗教改革は誰の手によつて始められむとするであらうか。

由來健全なる思想は都會に存せずして村落に生長する。謙虛神を畏れ人を敬ふ美風はエルサレムの貴族學徒の群に見る事が出來ず、却てパレステナの山間水邊に貧しき生涯を送

る漁夫農民の間に傳はつたのである。彼等は此世に於ては常に權威者から壓迫せられてゐた。されど彼等は敬虔な魂を抱いてひたすら神に頼り、他日神は必ず壓迫者を懲し給はむことを信じてゐた、舊約詩篇九、十、廿二、卅五、四十、六十九、百九等の諸篇は彼等を慰むるに足る章句である。彼等は歌うて曰く、

『主よ乏き者貧き者の望は汝を措きて誰かあらんや、

汝は之を聞き給ふべし。

恵ふかく優しき者汝の外に誰かあらんや、

汝は恵の御手を開きて謙る者の心を慰め給ふなり。』

路加傳一章に載せられたる『處女マリアの頌歌』は此の思想を歌ひ出でた代表的のものであらう。げにユダヤの山里に住めるザカリヤの一門、ガリラヤの小村ナザレに居りしマリヤ、ヨセフの家族の如きは貧しき心を抱いて「イスラエルの慰められん事を待ち望む」



者の好典型であつたであらう。彼等は劍をとつて神の國を強取せんとはせで、心靜かに祈禱と信賴とを以て救の至るを待ち望むたのである。神の慰めは先づ是等の民に與へられねばならぬ、知らず此世の慰主は何處より來るであらうか。

イスラエル國民は古來一種獨特の信仰を維持してきた。末の日に到らば神は一英雄を起して諸々の邦國を亡ぼし、エルサレムを中心としたる一大神國を建設し給はむ、其日こそ我等アブラハムの子孫は永遠の福祉を受くべきなれと確信し、現在如何なる不幸に遇ふも國家の滅亡を見るも、猶ほ此の信仰中に慰を見出してゐたのである。此の末日を『主の日』と呼ぶ、我等が舊約聖書を読むとき隨處に此の思想の謳はれてゐるのを發見するであらう新約の時代に近づくにしたがつて『主の日』は一轉して、壓迫者を亡して虐げられたる者を興し、惡人を罰して義人を賞する審判の日と變つた。其日いたらば既に義人の生涯を終つて世を去りし聖徒等も悉く再生して、茲に一大神國が生れ、其の聖國は永遠に破滅の期

なかるべしと信じたのである。之を世末的觀念と稱へる。ダニエル書及び之に類似の著作物の中に見る思想は即ちそれである。此の神國は『義の王』を中心として興るべく、『義の王』は英主ダビデ王の裔より出で、壓迫者を亡ぼし神民を釋放して先祖アブラハム以來約束されたる地を嗣がしめ、神の道を示して『義の王國』に處する道を示すであらう、<sup>\*</sup>キリストと稱ふる救主の來らむ時諸般の事を我等に告げん」とは當時一般の人々の抱いた思である。斯くてダニエル書にある『人の子』も此の偉大なる人格者を意味する名稱と解せらるゝに至つた。エノク書、ソロモンの頌歌等は此の王を様々の特性を以て描いて居る。知らず猶太人の救主待望は如何にして成就せらるゝであらうか。

上來述べ來つた所は二千年前に於ける猶太國の狀況ではあるが、世界人類の有様も之に似て居ると言ひ得るであらう。人類は慥かに神より離れて己がじし好める道を歩いて居る。或者は理想なく信念なく唯だ此世の享樂を願うて時勢と共に流轉しつゝある。或者は禁欲



的生活の中に狭量な自己流の宗教生活の中に安易を求めんとしつゝある。或者は政治的改  
 革に幸福なる世界を獲得せんと所期しつゝある。而して神の權威を隠蔽して人の權力を押  
 し立てんとするローマの如き覇者があるとき、虐げと苦にあへぐ貧しき民は地にみちて、  
 秘かに強く神の救を待ち望みつゝあるのである。若し慈愛ふかき父なる神在さば必ずや此  
 の憐むべき人類を捨て給はぬであらう。げに神は世々の預言者偉人をして道を述べしめ望  
 を與へ給うたのであるが、終には神自から救主を世界に降して、驕れる者をくちき貧しき  
 者を慰め、迷へる者に救の門を開き給ふは當然ではあるまいか、ヒブル書の筆者は此の眞  
 理を左の一句に道破して居る。「神＊むかしは預言者達により、多くに別ち多くの方法をもて  
 我等の先祖達に語り給ひしが、此の末世には御子によりて我等に語り給へり」と。

然らば神の御子はいかにして此世に來り如何にして人類に救の門を開き給ひしか。我等  
 は次章に於て此の答を解とかねばならぬ。

＊  
 ヒブル書  
 一章一節

## 第二章 耶蘇の生涯

### 一、降誕と幼時

我等は先づ基督降誕の年代を定めねばならぬ。今日一般に使用さるゝ西曆紀元は基督降  
 世を元年として起算するものなること周知の通りであるが、之は六世紀の頃デオニシウス。  
 エキシグウスと呼ぶ基督教修道僧の制定せしもので、今日の研究は彼の起算に誤謬あるこ  
 とを發見して居る。彼が起算の根據はルカ傳三章二節ならびに廿三節の記事で「テベリオ・  
 カイザル在位の十五年」は羅馬史によつて紀元廿九年なることが分り、此年施洗者ヨハネ  
 がユダヤの野に獅子吼し、半年或是一年の後「イエスの教を宣べ給ひしは、年おほよそ三  
 十の時なり」とせば、彼の計算通り、今年（昭和九年）は基督降誕後千九百卅四年となる



のである。然るに福音記者マタイは我等に傳ふるに、イエスはヘロデ王の治下に生れ給へる事を以てして居る。ヘロデ王とは紀元前四年に既に世を去つた人である。彼は未來のユダヤ王耶蘇イェスの降誕を傳聞して如何にかして之を弑せんと、其時ベツレヘムに於ける二歳以下の嬰兒を殺したと言ふ聖書記事に従へば、基督降誕は尠くも紀元前四年乃至六年の間に落ちて來なければならぬ。けれども此のルカ、マタイ兩福音書の矛盾した記事は下の如くに説明することが出来る。即ちテベリオ・カイザルが父王アウガスタスの死によつて王位を承けたのは紀元十四年八月であるが、彼は父王の老衰により紀元十一年頃より既に父と共に政治を見、殊にパレステナ地方に起つた騒亂平定のため兵を率つゐて來着、實際上の統治を行つた事が歴史に明かであるから、ルカの所謂「テベリオ・カイザル在位の十五年」を此の年より數へて、ヨハネの出現を紀元廿六年と決定すれば、其時年齢凡そ三十であつたイエスは紀元前四年か五年に降誕し給うた事になるのである。今日聖書學者は様々の理

由によつて紀元前四年より八年の間を上下して各自に説をなして居る。我等は煩瑣なる議論をやめて單に以上の聖書記事による論證を一例として茲に記し、凡そ紀元前五年を以て基督降誕の年と定めて満足しておかう。

耶蘇降誕は様々の美しき物語を以て彩られて居る。其等の物語を悉く解剖し論じだてずるは此書の目的ではない。我等はたゞ傳へらるゝ儘を記すに止めておかねばならぬ。ガリラヤの小村ナザレに住むヨセフの許嫁者マリアと呼ぶるゝ敬虔な一處女に、ある夜天使現れて、聖靈によつて彼女の胎に救主の宿るべきことを告げた。未だ人に嫁よめがざるマリア、姦淫者を嚴罰に處する習俗の中に育ちたる處女は、之を聞いて甚いたく怖れたが、神の聖旨とさとされて遂に「我は主の婢女はしためなり聖言みことばの如く我にあれかし」と従順に承け入れた。或人々はマリアの受胎を以て矢張り不義の結果と考へるが、我等は聖書に現れた彼女およびヨセフの性格から推して、マリアを不義の行ありし婦人とは考へ得られないのである。マリ



アは此の驚異すべき事件の後その親戚なる祭司ザカリヤの家を訪れて、篤信なる老祭司夫妻と共に胎中の嬰兒と神の聖意を思ひつゝ三ヶ月の静かなる信仰生活を過した。

耶蘇降生の季節も何月頃か定かにそれと定めがたい。十二月廿五日を聖誕節として祝ふは後にできた風習である。産月みちた頃恰もヨセフの一家は戸籍調査に就かむとて居村ナザレを離れて祖先の地なるユダヤのベツレヘムに來てゐた。かくて其處に暫く留るうち、世界の史潮を動かしたる嬰兒は星明かに夜氣水の如く澄みて一星爛として中天に輝く夕べ巡禮者旅人の假の宿なる石室の馬槽の中に呱呱の聲を擧げたのである。「彼は神と等しき位をすて己を虚らし僕の貌をとりて人の如くなれり」とは聖パウロの基督觀であるが、弱き者の友、亡ぶる人の救主なる耶蘇はいと貧しき環境に此世の生涯を出發したのであつた。嬰兒は猶太の例にならつて八日目に割禮を受け、其名もさきに天使の告げしところに隨つてイエスと命ぜられた。また其他猶太人として守るべき様々の習慣、宮詣での儀式など滯り

\*マタイ傳  
二章九  
ビリビ書  
二章六

なく終へて、ヨセフは幼兒とマリアとを伴うてガリラヤのナザレに歸つた。

ナザレは今も旅人の去るを忘るゝ風光明媚な山村として世に著れて居る。耶蘇は此の花靜かに草柔かく、葡萄たわゝに實る山里に育ちて、「智慧も身のたけも彌まさり、神と人にますく愛せられ給うた」。猶太人は概ね其の子弟の教育に熱心である。神の律法を幼少年者に教ふるは彼等の神に對する義務であつた。ヨセフは聖書に「義しき人」と記されて居る。敬虔なる祭司ザカリヤの一家を親戚に有つマリアは、貧しき心を抱いて靜かに神恵を待ちし典型的婦人であつたらう。耶蘇は斯かる家庭に成長して木匠の業を習ひつゝ、篤實なヨセフの口からは猶太教獨特の森嚴なる神觀律法を語られたであらう。豫言の書詩篇の卷々は夜なく慈愛ふかき母マリアの、潤へる聲調と敬虔の心根を通して讀み聞かされたであらう。親しき父母郷黨に伴はれて年毎にエルサレムに上る過越節は幼き耶蘇の心に殊に感銘を與へたものゝ一である。猶太人は此の節近づけば春の幾日を山越え谷越えて、

\*ルカ傳二  
章五十二  
マタイ傳  
一章十九節



古への物語に尊きさまの舊蹟を經つゝ、京詣の歌うたひて旅するのである。耶蘇後年の親しき天父の感情や豊かなる詩想はげに斯かる間に養はれたものであらう。また猶太人の居住する各地に散在する會堂はナザレの邑にも存して安息日毎に村人が其處に集うた。而して明敏潤達、獨創的な言説に屢々村老を驚かした青年耶蘇は聖書朗讀者たる役目を常に勤めた事と思はれる。加ふるに周圍の美しき自然は耶蘇にとりて最も有力な師友であつた。彼は路傍の草花落日の光榮に神の力と美とを觀じた。ガリラヤの山容湖光は神がイスラエルに約束し給ひし邦土にふさはしき姿して居る。其の地方一帯は到る處歴史的回顧にみちて居る。ナザレの南に開けしエストラロンの平野は左手に見ゆるギルボア山と共に世に著はれし古戰場である。其かみ豫言者エリヤがパアルの豫言者等と論争せしカルメル山は右手に聳えて山勢遠く海に臨むで居る。シケムの聖所、ヤコブの靈井、音に名高きベテルの靈場などは、エルサレムへの途すがら常に耶蘇の胸に過去を語りし名所である。耶蘇

ルカ傳四  
章十六節

は是等の神さびし舊蹟と古への歴史を思ひつゝ、風光明媚の故園に天稟の才徳を養ひて早くも三十年を過したのである。

## 二、受洗と試煉

我等は第一章に於て、當時の民心みな救主を思ひ神國の到來を翹望してゐたことを述べた。此時に方つて一豫言者が現れ、神國の到來まさに目睫に迫れるを告げ、民心の渴望を愈々興奮せしめたのも偶然でない。此の警告はユダヤの野より施洗者ヨハネの口を通して全土に響き傳へられた。――

『神國に入らむと思ふ者は先づ悔改めに相應しき果を結べ、凡て善果を結ばざる樹は伐られて火に投ぜられん。天國は近づきたり、審判は來らん、彼は手に箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め穀は消えぬ火にて焼きつくさん。二つの衣を持つ者よ、有た

ルカ傳三  
章八節以下



ぬ者に分與へよ、食物をもつ者もまた然せよ、取税人よ、定りたる税銀の外に何をも促るな。兵卒よ、人を劫かし誣ひ訴ふな、己が給料をもて足れりとせよ……。」

此の道徳的革新の一聲はバレステナの山々谷々に多大の反響を起した。「民まち望みぬたりし時なれば」、皆なヨハネに來つて罪過を告白し、葦高きヨルダンの清流に洗禮を受けたのである。まことに其狀は嘗つて俘囚時代の一詩人が歌ひし豫言の適中かと思はれた。

「荒野に呼はる者の聲きこゆ、——

野にて主の道を備へ、沙漠に我等の神の大路をなほくせよ。

もろくの谷はたかく、山と岡とは低くせられ、

曲りたるは直く、峻しきは坦かにせられん。

斯くて主の榮光あらはれ、人みな神の救を見む。」

神の救はまさに現れねばならぬ。此時まで山色明媚のナザレに神往靈感の裡に自己の使

\*ルカ傳三章十五

マタイ傳三章三節以下

命を默想してゐた耶蘇は蹴然として起つてヨルダンの川邊に來つた。ヨハネはイエスを迎へて「我は汝に劣る者なり」と固辭したが、耶蘇は「斯く正しき事をしとぐるは當然なり」と述べて、彼の手より受洗するや、「水より上るとき天開けて聖靈鳩の降ることく耶蘇の上に臨んだ」と傳へられる。また其時天より聲あつてイエスの胸に響いた——。

『是は我が愛しむ子、我が悦ぶ者なり。』

ヨルダン河畔に於ける受洗は實に耶蘇の公生涯に這入り給うた門出である。我等は此時より救主としての基督を仰ぎ、世界の歴史を新にした活動を見るのである。さりながら耶蘇は活動に入るに先だちて荒野に退き、自己の取らむとする神の事業についていま一たび默想し給うた。

人生とは何ぞ。究竟して人はたゞ肉體の生命を保つために本能的に此生命を養ふために働くのみか。否な、否な人は自然生活と精神生活との一致、靈肉一如の世界に生きねばな



らぬ。耶蘇即ち舊約の聖語を引いて答へて曰ふ、「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言ことばに由る」と。彼は既に神の力の全身に充溢するを覺えた、人は天賦の才能を何の爲めに働かすべきか、己が名譽のためか、單なる衝動や戯れの故に力を注いで可なるか、否な天資の力を徒費するは古人の戒めたる所謂「神を試むるもの」と言はねばならぬ。最後に耶蘇の最も深思せるは彼が事業の性質と其の手段とである。此世の方法を用ゐて我れ此世の王とならむか、あくまで同胞の期待に背いて靈界の救主とならむか。惡魔の形したる誘惑者は此時世界の國々と其の榮華を耶蘇の眼前に展開して言うた。

『汝ア若し平伏して我を拜せば此等を皆なんぢに與へむ』。

耶蘇は一喝して此の狹智なる誘惑を退けた。

『サタンよ、退け、主なる神を拜し唯だ之にのみ事へ奉るべしと記されあるなり』

此の試煉を終るや耶蘇は胸のうち晴るゝを覺えた。福音記者は這個の消息を「こゝマに惡

マタイ傳  
四章四節

マタイ傳  
四章七節

マタイ傳  
四章九節

マタイ傳  
四章十一節

魔は離れ去り、見よ御使みつかひたち來り事へぬ」と録して居る。斯くて基督は己が使命に對する巖の如き決心と神と共なる歡喜の心とを抱いて荒野を立ち出でたのである。

### 三、故郷にて

荒野四十日の試煉黙想を経た耶蘇は、新しき信念を抱いて再びヨハネの許を訪れた。此時ヨハネは弟子達に、眞の救主まさに世に現るべく、我は唯だ其の準備として道德的革新の洗禮を施すに過ぎず、と語り聞かせてゐたところ、いま「恩寵めぐみと眞理にみち其顔に神子の光榮を漲らせて」近づき來る耶蘇を認めるや、話頭一轉、

『見よ、これぞ世の罪を負ふ神の羔羊！』

と弟子等に指示した。更に我に遅れ來らん者は我より優れる者なり、我はその鞋くつの紐をとくにも足らずと豫あきらて語れる人こそ此人なれと告げた。茲に於てアンデレ・ヨハネの二人の

ヨハネ傳  
一章十四節

ヨハネ傳  
一章廿九節



弟子は直ちに救の道を求めて耶蘇に従はんと決心した。此折の耶蘇と施洗者ヨハネとの會見の有様は興味ふかきものであつたらうが、讀者の想像に任すのみで聖書にも多く記されてゐない。耶蘇は翌日二人の新弟子を伴うて故郷ガリラヤに向つたのであるが、道すがらアンデレは其の兄弟ペテロに遇うて歡喜の聲をあげて曰ふ、

『我等メシヤ（救主）に遇へり。』

また同郷の友人ピリポに遭うや之をも一行に加へて一と先づ耶蘇の故邑ナザレの家に歸り着いた。

\*ヨハネ傳  
一章四十

耶蘇の母マリアは長子イエスの行衛知れぬ長き不在に心を傷めつゝ靜かに神の聖旨を思つてゐたであらう、此時新なる使命を自覺して歸家せし耶蘇が果して其母の心を安かならしめたか否かは分らない。三日目に隣村カナの親戚に婚姻が擧げられて、耶蘇の一家も招かれて其席に臨んだ。席上酒盡きし時、イエス石甕いしがみに満たせし水を芳醇なる葡萄酒に變へ

し時に交せし問答は僅かに其の消息を窺ふに足るものであらう。此奇蹟は耶蘇が神の力と榮さかとを顯あらわはしたる最初の徴しるしとして、列たゐる親族を驚かし弟子達を信ぜしめたと、其時の弟子の一人なるヨハネは其の福音書に記して居る。

○ヨハネ傳  
二章十一

數日の後耶蘇の一家はガリラヤ湖畔の小邑カペナウムに赴いた。ヨルダンより彼に隨從した數名の弟子達は其の故里なる隣村ベテサイダに歸り、郷黨に其の新に知れる師に就いて語り歩いた。ピリポは友人ナタナエルに遭うて曰うた。

『我等はモーセが律法きよみに録しし所、豫言者たちが録し、所の者に會へり。ナザレのイエスなり。』

\*ヨハネ傳  
一章四十五  
以下

『ナザレより何の善き者か出づべき。』

『來りて見よ。』

耶蘇の人格に感激した弟子達は議論よりも直接耶蘇の許に其の友人を連れ來ることに努



めた。耶蘇に接して其の人格的迫力と神秘的靈力に動かされた者は、みな直ちに彼に歸依した。

此の噂を聞いた郷人は此の新預言者に遇はんものとカペナウムに赴いた事であらう。耶蘇は安息日毎に其地の會堂にて福音を宣べ新生の道を説くや、聽く者その權威ある教に驚いてみな歸服した。また會堂内に於て一人の鬼に憑かれたる人の病を退け、シモンの岳母シモンの岳母の熱病を治した事は、彼の名を一層附近に高からしめ、遠近相傳へて或は其の教を聞かんとし或は己が病を癒いされんとして、衆人日に踵を接して耶蘇の許に來り集つうた。されど「我\*また外の町々にも神の國の福音を宣べ傳へざるを得ず、我が遣されしはこれが爲なり」とは耶蘇の心境である。彼は愈々こゝに傳道旅行を思ひ立ち、先づ同伴者を得るために、さきに耶蘇に歸服せるアンデレとシモン、ヨハネとヤコブの兩兄弟がガリラヤ湖畔に網なうてるを招いた處、彼等も決然として其の生業と故郷とを捨て、人を漁ある者となるべく耶蘇

\*ルカ傳四章四

の後に隨つた。道に一税所を過ぎたとき、其處に座してゐた税吏マタイも亦一切を捨て、耶蘇に従ひ新生涯に入る決心をなした。耶蘇は是等の弟子を伴うてガリラヤの諸會堂を巡回し、其の新法を宣傳したのである。

\*マタイ傳九章九

#### 四、ユタヤにて

紀元廿七年の春が廻めぐつて過越節が近づいた。耶蘇もまた祝節を守るためにエルサレムに上つたが、神殿の庭に、牛、羊、鳩を賣る者、兩換する者等、舗を並べて求利に騒ぐ様を見て、義憤默視するに忍びず、「我が家は祈禱いのりの家と録しされたるに汝等は商ひの家となすか此等のものを此處より取り去れ」と叱咤しつゝ、商賈の群を一掃して莊嚴なるべき神殿の庭を清めた。都の中心に於ける耶蘇の此の行爲は實に彼がイスラエル全土に新法宣傳の宣言をなしたと見るべきであらう。改革の道念烈日の如く激はげしく、峻嚴なる意力秋霜にも譬

\*ヨハネ傳二章十三



へつべき耶蘇の風手は、人をして宛然古への豫言者を想起せしむる者があつた。『弟子たち「汝の家を思ふ熱心われを食はん」と録されたるを憶ひ出せり』とは其時之を實見せるヨハネが回顧の語である。

ヨハネ傳  
二章十七

耶蘇は此の祝節の間暫く都に滞留してゐた。一夜ユダヤ人の宰ニコデモに新生の福音を説いたのは此時である。其れより都を去り、弟子を伴つてヨルダン河畔に下り其處に留つて福音を宣傳へた。聲名を聞いて慕ひ集る者日々數ふべくもない。皆己が罪を告白して新生の洗禮を受けた。此時さきの施洗者ヨハネもまた稍や上流なるアイノムの邊で悔改の洗禮を施してゐたが、名聲漸く衰へて耶蘇に就く者の數が遙かに多い。或る人がヨハネに來つて言うた。

ヨハネ傳  
三章一以下

『見よ、汝と共にヨルダンの彼方に在りし者、汝が證せし者、バプテズマを施し、人みな其許に往くなり。』

ヨハネ傳  
三章廿六以下

ヨハネは少しも動ぜずして靜かに答へた。

『人は天より與へられずば何をも受くること能はず、我はキリスト(救主)に非ず唯だ其前に遣されたる者なり……。彼は必ず盛になり、我は衰ふべし。』

何と言ふ謙遜な己を知る者の答だらう。併し耶蘇も斯かる評判が世に聞ゆるを好み給はなかつたかヨハネの活動して居る間はユダヤを去らうと決し、弟子達を伴うて再びガリラヤに歸つた。途上、ヤコブの泉井の傍にてサマリヤの女に道を説きし事も記憶すべき一の事件である。

ヨハネ傳  
四章四節以下

### 五、イエスの姿

此の機會に我等は新法宣傳者としてのイエスの姿を素描する必要があるであらう。バプテズマのヨハネはエツセネ派に屬する禁欲的な生活を送つた預言者である。峻嚴にして猗



介、偽善を憎むこと蝮蛇を見るが如く、傳教僅かに年餘、不義を責め、改悛を促がして、叱咤獎勵殆んど聽者の正視を許さざる概があつた。之に比ぶればイエスの姿は遙かに穩和である。彼は自身にも弟子にも宗教生活に入る條件として、サドカイ、エツセネ派の如く世俗の生活を厭離し平素の職務を抛棄することを要求しなかつた。イエスにも入信の徒に對する強き言葉がある。「我に従へ、死にたる者に其の死にたる者を葬らせよ、」<sup>\*</sup>「手を鋤につけてのち後を顧る者は神の國に適ふ者にあらず」<sup>\*</sup>等一點の妥協を許さぬ激しき語である。併しイエスの宗教は東洋的な出世間の道ではない。神の招に對する人の意志の全的歸從である。神が人に要求し給ふ所は外部の生活との別離でなくて、内面の此世に就ける關心を放棄して、全心を以て神の國へ躍り込む赤心である。信仰は人々が普通の活動に従事しつゝ這入り得るものである。所詮イエスは野に叫べる聲ではなくて、カペナウムの雜鬧の中に、ガリラヤ湖畔の漁夫の間に、田園の勞働者に、はた街道の旅行者に伍して、友となり導

マタイ傳  
八章廿二  
\*  
ルカ傳九  
章六十二

手となつた親みふかい教師であつたのだ。殊にイエスの教には勞働者ならでは窺ひ知る事のできない勞働生活に對する正確綿密な知識が溢れてゐた。神國の奧義を示す例話は田園に種蒔く農夫や、葡萄園に働く人夫や、野に羊を飼ふ牧人である。宗教教師と言へば煩瑣な律法學者や貴族的祭司か、然らざれば特殊の階級に生くるパリサイ人等のみしか考へ得ない一般人に、イエスは奈かに親しみ深い姿に映つたであらう。

然りながらイエスを全く在家の一平民傳道者と速断してはならない。彼は其の弟子達によつてラビと呼びかけられて居る。此の稱號はユダヤの律法學者の特殊な人々にのみ與へられるものである。紀元一世紀以後に於て殊にラビの階級は専門的な教育と一定の學問形式と生活様式とによつて一般人とは區別せられたる人達であつた。耶蘇の時代に於ては我等が後のラビ文學によつて窺ひ知る程の特殊的な階級ではなかつたにせよ、事實彼はラビの如く會堂シナゴグに現れて教訓し、ラビの如く弟子の群を其の周圍に集め、ラビの如く知識に飢

\*  
マルコ傳  
九章五、  
一、一章二  
一、一章四  
ハネ傳三  
章二



ゑたる人々と律法の問題について論議して居る。彼の舊約聖書に對する知識はかいなでの猶太教徒の到底及ばぬ深さ廣さを示してをる。福音書に現れた彼の比喩や説話はラビの術や論法に酷似してゐる。律法のうち最大なるものとしての「敬神愛人」の金句や「明日の事を思ひ煩ふな」「己が量る量にて量らるべし」、「門よ叩けよさらば開かれん」等はラビの言葉の中にも發見せられる格言である。其れ故我等は彼を大工の子イエスとして、靈感に動かされた田園の預言者として、餘りに簡單に考へてはならない。彼が三十歳に及ぶ迄の生活は我等に隠されて居るが、普通人の如く結婚生活に入らざりしを見れば、其間、深思、研究、默想、神交の靈的修業道が長く續いたと推察してよからう。かくて一たび世に現るゝや、孔子の如き教師として、釋迦の如き出家として、其の教團を率ゐて説法し預言し警世したのである。

併し耶蘇は當時の學者パリサイ徒のやうな形式に囚はれた道學者流ではあり得なかつた

律法を鵜呑みにして文字の末に拘束せられる窮屈なラビではなかつた。馬太傳第五章以下の有名な山上の説教に於て、彼は舊約の律法を自由に解釋して新しき意義を闡明して居る。

彼は律法の形式を捨て、精神を汲み出した。<sup>\*</sup>「われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな、毀たんとして來らず反つて成就せんためなり」とは彼の信念である。加ふるに彼を特色づけるものは其の祈禱の生活である。猶太の宗教家たちは己が職務として律法の實行と

<sup>\*</sup>マタイ傳  
第五章十七

して「會堂や大路の角に立ちて」祈つたが、耶蘇は神との靈交のために靜かなる場處にて禱つた。「汝等祈るとき己が部屋に入り戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ」とは彼が弟子に與へた祈禱の方法と精神とである。彼の公生涯に於て屢々我等は彼が群集を避けて祈のために山に遁れた記事を読む、變容貌の山に於てゲツセマネの園に於て、三人の使徒が疲労と睡魔に耐え得られなかつたに反し、耶蘇ひとり長く祈禱三昧に沈潜し得たことは、彼が若き日の修養工夫の尋常ならざるを證して居る、ラビの律法的宗教は耶蘇によつて神

<sup>\*</sup>マタイ傳  
第六章五、  
六節



交の宗教に高揚せられたのである。

更に耶蘇が他のラビ學者の徒と異なる點は其の追隨者の多種多様な點である。彼の周圍にはラビの周圍に見出すことのできぬ婦人や娼婦や罪人や税吏がゐた。「幼兒の我に來るをどむな」と、普通のラビ教團の考に囚れた弟子を戒めて小兒の群に親んだ耶蘇は、當時の宗教教師の典型と全く異なるものである。是等はいかに耶蘇の姿を豊かに和やかに人間的に世人の眼に映せしめたか。若し我が日本の靈界の先覺に比べて説くならば、彼は白隠の如く沈思修養した、日蓮の如く剛毅に預言した、親鸞の如く平民に傳道した、良寛の如く童心を抱いて生活した。而して之に神道家の敬虔心と儒學者の道義心と自然詩人の神魂とを渾然融合せしめて僅かに「完き人」耶蘇に近き姿を想像し得るであらう。

最後に、人間耶蘇の姿に「神子耶蘇」の光を加へなければ其の全貌を寫し得たとは言はれない。其れは畫家によつて賦與された背光や光輪ではなく、耶蘇自身の姿より顔より「衷

なる人」より發する見えざる光線である。此光を感得したるとき群集は「神の子イエスよ我を救ひ給へ」と叫び、學者も「汝は神より來る師なり」と告白し、弟子等は「活ける神の子なり」と信從したのである。げに耶蘇の顔には神彩が輝いてゐた。彼の姿には「其の衣の裾だにさはらば」病も癒えんと感ぜしむる神秘力が放射してゐた。斯かる姿や光は感得すべくして説明し得べき者ではない。我等が往々尊敬すべき人格者や聖徒の風格に言説を越えたる神秘力を感じる如く、耶蘇の人格には一層の神的光彩が發散してゐたのだ。されば耶蘇を描くにあたつて徒らに其の外貌や體軀を寫すのみにして、此の見えざる紫外線に映る神姿を逸するならば彼の全貌を知り得たとは言へぬであらう。醫學者が屍體を解剖して綿密なる調査をとげるとも活ける其人を知り得ない如く、我等は科學的にイエス傳を研究し、傳説の衣を剥ぎ信仰的色彩を洗ひ落して、以て眞實の耶蘇を描き得たりと思ふは大なる誤謬である。尺度で量つた耶蘇の形より、心魂に映つた耶蘇の姿こそ大切なもので



はなからうか。當時の民衆の前に現れた耶蘇は慥かに活ける耶蘇であつて解剖されたる耶蘇の屍しかばねではない。彼の弟子の一人なるヨハネは後に「我等その榮かぶを見たり、實ひに父の獨子の榮光にして恩惠めぐみと眞理まこととにて満みてり」と述懐なつかして居るが、所詮、心眼を開いて明鏡裡あかりに自からさし來る光によつて映うつじ出されたる神の獨子を認知すべきである。

ヨハネ傳  
一章十四

我等はかゝる神人イエスが、一千九百餘年前ガリラヤの野邊に出現した事を想像して、偕ともて彼の行動の跡を辿つて行くであらう。

## 六、ガリラヤ傳道(活動期)

耶蘇の一行がガリラヤに歸つてからの活動は、その短かき傳教生活中最も目覺めざましきものであつた。會堂に片手枯かわえたる人を癒なし、カペナウムに百卒長の病僕を醫いし、ナインに寡婦あづなの愛子を甦よみがらせ、西に赴ゆき東に來り、綠布きぬく丘の上に、波靜なみかな湖うみの岸に、到る處

に神の國の福音を宣べ傳へて「人の子は枕する所さへなき」程であつた。民衆はまた遠く耶蘇の名を聞き、慕あこひ集つて教を聽きく者何千人なるを知らない、殆んど食する暇さへなく耶蘇に隨まうて來る者さへ多かつた。

マタイ傳  
八章十八

耶蘇の傳教には常に種々の奇蹟物語が伴うて居る。我等は今こゝに奇蹟論をなす邊がない。併し耶蘇から奇蹟物語を取り除くならば福音書は現在の半ば以下となるであらう。唯だ多くの民間信仰に見るやうに奇蹟が其の宗教の中心ではない。耶蘇はつとめて奇蹟の傳へらるゝことを避けた。パリサイ人等が好奇的に彼に奇蹟を求めたとき彼は斷乎として拒否した。併し民衆の肉體的苦惱に對する耶蘇の憐憫の情が動くとき、彼の人格に對する純一無雜の信仰が捧げられるとき、そこに神の恩寵を表示すべき奇蹟が行はれた。其れは愛より出づる奇蹟であつて人を驚かす爲の奇蹟ではない。彼は人々を肉の治癒から靈の救済に導いた、肉體の治癒よりも救罪の福音として奇蹟が行はれたのである。故にそれは彼の口



より出づる説法と均しく神の榮光を表す徴に外ならない、故に貧しき心を抱いて救を待ち望んだイスラエルの民には耶蘇の説法も奇蹟も共に福音であり救済であり恩寵であつたのだ。併し傲岸にして自らを高しとするユダヤ教徒には耶蘇の宣ぶるところ行ふところは神への冒瀆であり彼等への蹟く石であつた。其頃かの施洗者ヨハネはガリラヤの分封の國守であつたヘロデ・アンテパスの罪を面責して遂に捕へられて獄屋に淋しき月日を送りつゝ、切に神國の到來を待ちかねてゐたと見える。彼は來るべき救主は「手には箕を持ちて禾場をきよめ、穀は消えぬ火にて焼きつくす」審判主として考へてゐたが、今獄窓に傳はる耶蘇の噂は全く期待に相違してゐた。彼は耶蘇の許に兩三人の弟子を遣はして「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」と問はしめた。その時イエスは斯く答へた。

「往きて汝等が見聞きせし所をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は蘇生へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我が

マタイ傳  
三章十一  
十二

ルカ七章  
十八以下

ために蹟かぬ者は幸福なり。』

此の答を得たヨハネが果して其のメシヤ觀に新風光を發見して満足せしや否やは知る由もないが、此の一句は耶蘇のガリラヤ傳道を如實に端的に言ひ現したものと云うてよからう。我等は其の狀況を密かに寫すをやめて、最古の福音書たるマコの記録したる一節を茲に引用するにとゞめよう。

『イエス弟子と共に海邊(ガリラヤ湖邊の意)に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向ひの地およびツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて御許に來る。イエス群衆のおしなやますを逃れんとて小舟を備へおくことを弟子に命じ給ふ。これ多くの人を醫し給ひたれば凡て病に苦むもの、御體に觸らんとて押し迫る故なり。』

マコ三章  
七以下

ガリラヤ傳道の最高頂は十二使徒の任命派遣であらう。耶蘇の傳道は開拓より漸く建設



時代に入り、一には其の傳道を助け一には耶蘇亡き後眞理を擔ふべき者を選んで特別に之を訓練教導し置くべき必要が生じた。最初に耶蘇に従つたベテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、ピリポ等は其の筆頭に擧げられた。バルトロマイ、トマス、税吏マタイも此の尊き列に加へられた。アルバヨの子ヤコブ、タダイ、熱心黨のシモン、及びイスカリオテのユダである。耶蘇は是等の十二人を常に側近く伴うて種々の教をなし神國の奧義を語つた。種々の理由から一般人には譬を以て神國の福音を説いたけれども、彼等使徒等には直接神國の秘義を知らしめ、また彼等の使命を語り神と人とに奉仕受難すべきを教へた。彼が十二人に惡鬼を制し病を癒す能力と權威とを授けて之を傳道に派遣したとき、興味ふかき訓戒を與へて居る。

『旅のために何をも持つな、杖も袋も糧も銀もまた二つの下衣をも持つな。價なしに受けたれば價なしに與へよ。何れの町何れの村に入るとも其中にて相應はしき者を尋ね出

マコ傳四章十一

ルカ九章一以下  
マタイ十章六以下

して、立ち去るまでは其處に留れ。人の家に入らば平安を祈れ……』  
是等の言葉を讀むとき我等はそとに僧迦の托鉢規定や俳聖芭蕉の行脚の掟を想起するではないか。無所有の生活に絶對に安住する生涯は「神と偕なる生活」の型だ。基督教會の修道僧の生活様式は既に耶蘇の教團生活に其の先蹤があるのである。

耶蘇の隨從者はますます増加して行つた。たゞに弟子達ばかりでなく多くの婦達さへも己等の全財産を擧げてイエスに供事した。耶蘇は是等の弟子たちに種々の譬、バンドネの譬、芥種の譬等を以て神國の奧義を語つた。また彼等を遇するに神の道を聞きて之を行ふ者は是れ我が母我が兄弟我が姉妹なりとの精神を以てした。今やガリラヤ湖畔周圍の村々は福音の光にかゞやき渡つた。眞に預言者イザヤによりて言はれたる言葉は爰に實現したと言うてよからう、曰く「ゼブロンマタイ四章十五の地、ナフタリの地、海の邊イザヤ一、九章一、二節、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、暗に座する民は大なる光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれ

マタイ十章五

マタイ四章十五  
イザヤ一、九章一、二節



り。』

## 七、ガリラヤ傳道（反抗期）

斯かる間に耶蘇のガリラヤ傳道は既に二年を經過して春の過越節は再び近づいた。ガリラヤの村落を貫く道路は都に上る巡禮者の群を以てみちてゐる。彼等は聖書に豫言された救主がガリラヤに現れて神國の到來を説いて居ると聞いて、路を迂<sup>ま</sup>げて耶蘇の後を追ひ、其の權威ある教法と巧妙なる比喩談に魅せられて、己が旅路をも忘れて耶蘇の行く所に随伴したのであらう。一日耶蘇はガリラヤ湖を見下す風色明媚の丘に彼等を伴うて一場の説教を試みたる後、彼等<sup>\*</sup>が既に食盡きたるを見て春草美しき<sup>ひら</sup>薙に座せしめ、少量のパンと魚とを以て彼等を飽食せしめた。此時餐筵に列りし者五千人と傳へられて居る。

\*ヨハネ六章三以下

耶蘇が爲した此の奇蹟は多數のガリラヤ人ユダヤ人に異常の印象を與へたと見える。五

千人の中にはイスラエルの救を待てる信仰者や、神の國を武力を以て將來せんとする熱心黨もゐたであらう。彼等は耶蘇の教法と奇蹟とを目のあたり見聞して、「實にこれは世に來るべき預言者なり」と叫んだ。熱心黨の連中は時こそ來れと雀躍<sup>こぞどど</sup>して、耶蘇を王に推戴し宿年夢みた神國の旗風を翻さんと思つた。耶蘇は彼等の舉動を察して獨り山に遁れ、日暮れて秘かに弟子達と共に對岸カペナウムに渡つた。群衆は肝心の耶蘇を見失うてあちらこちらを尋ね廻り、翌日漸くカペナウムの町に探し當てた。

『ラビ何時こゝに來り給ひしか。』

耶蘇は彼等に對し 此時大説教を試みた。

『嗚呼、汝等が我を尋ねるは、パンを食ひて飽きたる爲めか。汝等朽つる糧<sup>かて</sup>のために働かで永遠の生命に至る糧のために働け。此は人の子の汝等に與へんとするものなり。神は今や汝等に眞のパンを與へ給ふ。我は即ち天より降りし生命のパンなり。我に就<sup>た</sup>る者

\*約六〇十  
四以下



は飢えず、我を信する者はいつ迄も渴くことなし。汝等此世の王國のために我を待つ勿れ、我が天より降りしはたゞ我を遣はしし神の意を行はんのみ。神の遣はしし子を信する者は幸なるかな、彼は終の日に蘇生へらさるべし。神の御意は、凡て子を見て信する者の永遠の生命を得んことなり……。』

猶太人の或者は耶蘇の「我は天より降りし生命のパンなり」との言葉を解しかねた。「彼が父母は我等の知る所ならずや、彼はヨセフの子にあらずや」と咬いた。耶蘇はカペナウムの會堂に立つて更に基督教の核心とも謂ふべき永生に到る道に就いて説法した。

『誠に眞に汝等に告ぐ、人の子の肉を食はず其血を飲まずば汝等に生命なし。我が肉を食ひ我血を飲む者は永遠の生命をもつ。夫れ我肉は眞の食物我血は眞の飲物なり。我肉を食ひ我血を飲む者は我に居り我も亦彼に居る。我の父(神)によりて活くるごとく我を食ふ者も我によつて活くべし。』

\*ヨハネ傳  
九章五十

神との一致、基督との融合こそ耶蘇の説かむとする第一義であつた。神秘的に基督のうち活くる者のみ彼と共に永遠の生命を享受する事ができる。此の永生を得たる者は即ち彼の信徒である、神國はそれ等の信徒の間に建てらるゝので斷じて此世の王國ではない。天父の此世を救ふ御旨も亦此の意味に外ならぬ。

斯かる靈的な耶蘇の教が只管此世の救を望んでゐた群衆に徹底する筈がない。羅馬の主權に對して獨立の軍を起すべき教主を期待してゐた熱心黨の輩は耶蘇の言葉にいたく失望した、失望した彼等は耶蘇の許を去つた。昨日まで耶蘇の後を追うて何千の人が隨いて來たが此の説教を轉機として彼の周圍は頓みに淋しくなつた。耶蘇は傍に侍した十二人の使徒\*に問はれた。

『汝等も去らむとするか。』

『主よ、我等誰にか往かむ、永遠の生命の言は汝にあり。我等は信じ且つ知る、汝は神

\*ヨハネ傳  
六章六十  
六以下



## の聖者なり。』

シモンペテロが一同の心持を代表して斯く答へた。此の言葉を聞いた耶蘇の喜は察するに餘りある。嗚呼眞理は自ら高しとする猶太學徒の心や、此世の政治運動に囚はれた熱心黨の胸に徹底せられずして、赤子の如き態度を以て耶蘇の言葉——人格に歸依せる質朴なるガリラヤ人の心に通じたのである。耶蘇は覺えず天に向つて謝せざるを得なかつた。

『天地の主なる父よ、我感謝す、此等のことをかしこむ者きこに隠して赤子に顯し給へり父よ、然り斯くの如きは御意ごいに適あたへるなり。』

ルカ傳十  
章廿一節  
以下

彼はまた使徒を顧みて喜の情を叙べた。

『汝等の見る所を見る其の眼は幸福なり。我れ汝等に告ぐ、多くの豫言者も王も汝等の見るところを見むと欲したれど見ず、汝等の聞く所を聞かむと欲したれど聞かさりき。』

此の事件は實に耶蘇の傳道生涯を前後に分つ區劃點である。是まで彼の傳道は一般を對

象とした福音の傳播であつたが此後は主として十二使徒を中心に説示された。外部への宣傳より内部への建設に移つたのである。舞臺もまたガリラヤよりユダヤへと轉じた。

## 八、反對者

我等は茲に漸く擡頭しかけた耶蘇の反對者に就いて一わたり記述しておかねばならぬ。耶蘇に對する第一の反對は熱心なる猶太教徒の間に起つた。之が第一聲は既にガリラヤ傳道の初期に擧げられて居る。耶蘇カペナウムの某家に神教を垂示しつゝありし時、パリサイ人パリサイ教師等も座にあつた。此時中風を病む者を床に載せて擔ひ來り耶蘇に癒されむことを願ふ者があつた。耶蘇は彼等の謙虛神の憐を乞ふ熱心と、病苦と罪を意識しつゝ一筋に神助に頼らんとする信仰の色を其の顔容に認めて、

『人よ汝の罪赦されたり』

ルカ傳五  
章廿以下



と宣した。猶太教に於ては神を畏敬するのあまり却て實生活から之を遠ざけ、神の名エホバを口にす事すら冒瀆の罪と考へた。況んや自ら憎して神の子と稱し、或は神の如き權威を宣ぶるは許しがたき罪惡である。座に居合せた學者パリサイ人等は憤然として「此の瀆言を言ふは誰ぞ、神より外に誰か罪を赦すことを得べき」と怒つた。此の反感の火焰は更に耶蘇の安息日の行動に就いて再燃した。猶太教に於ては安息日は絶対に休息すべき日であつて、路程廿町以上を歩行する事さへ此禁を犯すものと考へられてゐた。然るに耶蘇の一行が安息日に麥島を過ぐるるとき、弟子達が麥穂を摘んだのを見たパリサイ人は「汝等は何故安息日に爲まじき事をするか」と詰問した。數日の後耶蘇が再び安息日に會堂に於て教を垂れた時、片手枯えたる人を憐に思つて醫した事がある。之を見たパリサイ人は又しても耶蘇は安息日に業をなせりと非難した。耶蘇は答へた。

「我れ汝等に問はん、安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと亡すと、孰かよき。

\*ルカ傳六  
章一節以  
下

\*ルカ傳六  
章九節以  
下

人の子は安息日にも主たるなり。」

之を聞いた彼等は「狂氣の如くなりて耶蘇に何をなさんかと語り合へり」と福音書は報じて居るが、當時の猶太教は斯くも頑迷固陋なものであつた。然れば耶蘇および其の弟子達が或は手を洗はずして食卓に就き、或は取税人罪人と共に飲食し、或は斷食を守らぬなど、様々のユダヤ的風習を打破し、併かも平然として「誰も新しき酒を古き革囊に入るゝことは爲じ」と謂ふに至つては、誇り高きパリサイ徒の到底默視し能はぬところである。神に重大なる罪を構へた者は石にて打殺すべしとは猶太律法の命ずるところである、此時より彼等は神威の冒瀆者猶太國風の背悖者イエスを殺すべきことをヘロデの黨に謀つたのである。

\*ルカ傳五  
章卅七

さらばパリサイ徒が共に謀つたヘロデ黨は何故耶蘇に反對したか。彼等はヘロデ王家に忠勤を抽んで、此王家を護り立て、パレステナ一圓の地を治めしめ、あはよくば羅馬より



派遣された代官を逐うて、猶太人年來の宿望たる獨立王國をヘロデ王家の手に恢復せんと志す輩である。随つて自ら猶太人の王なりと稱する耶蘇は彼等の敵でなければならぬ。加ふるに耶蘇の奇蹟と權威ある教とがガリラヤ全土の民心を彼に歸嚮せしめた事は、ヘロデ黨の嫉妬を買ふに充分である。或は豫て約束せられた猶太人の王は耶蘇によつて成就せられるかも知れぬ。是れ彼等が耶蘇を殺さざるうちは枕を高うして眠ることが出来ぬと考へた所以である。

最後にヘロデに就いて一言しよう。彼は迷信に強き優柔不斷の漢である。曩きに愛妾ヘロデヤの妖言に惑はされて獄裡にヨハネの首を刎ねた以來、良心の苛責を感じ疑心暗鬼を生じてゐた彼は、恰も其時ガリラヤの隅々まで響き渡る耶蘇の名声を聞いて、必定ヨハネの再生なるべしと思ひ恐れた。是等の消息を聞き知りし耶蘇は、自己の身邊に影の如く下りくる壓迫を感受して、其れより後は成るべく猶太人の前を避け、弟子達の教育に力を盡

マ<sup>\*</sup>ルコ六  
章十四以下

した。「汝等慎みてパリサイ人の麴酵とヘロデの麴酵とに心せよ」との戒も斯かる機に與へられたものであらう。十二使徒も一團となつて常に行動を共にする事が困難になつた。二人宛別れ／＼となつて各々志す方に赴いた。唯だ熱血漢ベテロ、雷の子と呼ばれたヤコブとヨハネの三人が耶蘇の行先に随伴して其の勢力を頌つ事となつた。

マ<sup>\*</sup>コ傳八  
〇十五

### 九、三使徒の教育

思ふに耶蘇の三年の公生活中最も人に隠れたる期間は此頃であらう。彼は此の機會に、やがて基督教會の柱となるべきベテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を教育する事に専心した。彼等もまた群衆に妨げらるゝ事なく心ゆくばかり其師に親炙して人格の秘奥に觸れる事ができた。耶蘇は彼等を伴うて北の方海に沿ひたる異邦ツロ、シドンの地方に出かけた。それより再び道をかへしてヨルダンの東デカポリス(十の町の意)地方を旅行した。是等の地



は風物住民ともにガリラヤ、ユダヤとは著るしく異つてゐる。殊にデカポリスはギリシヤ殖民地で異邦文化と羅馬勢力の錯綜した地である。弟子達は股賑なる商業や町々を通ずるローマ人の大街道や軍隊の屯營やギリシヤ的建築や圓形劇場を見學した。かくて數週間の修學的旅行のはてにダマスコ街道の入口なるピリビ・カイザリヤの町にめぐり來つた。

ピリビカイザリヤはパレステナのうち最も美はしき町の一つである。北にヘルモンの高峰紫にすみて、山勢カシヤペーの谷に限られて緑の裾野となるところ、ヨルダンの水源は山腹の谷間に起り、清泉溢れ流水盡きず、野菜と果實たわゝに生じ、豊饒なる田野遙かに西に延びて居る。亭々たる白楊樹榭樹は夏日の涼蔭をつくり、低く咲き亂れたる草花は行人の眼を樂ませる。此の美しくしき邑は昔より異教崇拜の中心地であつた。其かみ精靈教の盛なりし頃セム民族のバアルガド（幸福の神）が此處に祀られた。希臘文化の侵入と共に牧人の神パンがこゝに拜された。而して今羅馬の屬領地となりてヘロデ大王羅馬皇帝のた

めに宏壯なる殿堂を築き、其子ピリポに至つて街路の美と輪奐の壯とは一層其光を増し、名もピリビカイザリヤと稱さるゝに至つた。げに此世の榮華と權威とを示す代表的な町ではある。

時は夏の頃、耶蘇の一行は此町に這入つた。其衣は破れたれど磐石の如き信念が耶蘇を包むで居る。其髪は亂れたれど神を見る彼等の眼光は輝いて居る。見よ、此の壯麗なる都市の美、其は嘗て荒野の試煉に於て一蹴し去つたものではあるが、人の作りし美は往々神の與へ給ふ知見の光を奪ふことがある。知らず三人の弟子の心は如何に。耶蘇は彼等を願みて問うた。

『人々は我を言ひて誰とするか。』

弟子は答へた。

『或人はバプテズマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は古の預言者の一人の甦生せるなり』



と言ふ。』

耶蘇は更に追求した。

『汝等は我を言ひて誰とするぞ。』

三人のうちのペテロは最も感激性に富み其師に對する信服の情に燃えて居る。彼は進み出でて答へた。

『汝は活ける神の子基督なり』

此の問こそは耶蘇が長く弟子を教育しつゝ深く胸底に藏して容易に發せなかつたものである。此の答こそは耶蘇が祈禱と深慮を以て待ち續けたものである。彼が二年餘の傳教も人々より此の信仰告白を聞かむが爲ではないか。洵に耶蘇を此世の救主ならぬ靈的の王（キリスト）と認める事は、猶太的自負心に拘着してゐる者や單なる愛國熱心黨の思ひ及ばぬ所である。血肉につける野心や名譽を去つて靈界に新生した者でなければよくする所でない。

い。耶蘇は讚嘆した。

『ヨナの子シモン（ペテロの前名）汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉に非ず、天にいます我が父なり。』

眞理は聽者の信仰の深淺に應じて語られねばならない。耶蘇は用意周到なる教育家であつた。彼は「己が基督なる事を誰にも告ぐなと弟子達を戒め」、彼等には徐ろに救主の眞乎の姿について語り始めた。『此時よりイエス弟子達に己のエルサレムに往きて、長老祭司長學者等より多くの苦難を受け、かつ殺され、三日目に甦へるべき事を示し始め給ふ』と福音記者は記して居る。此のメシヤ觀も亦これまで耶蘇が胸臆ふかく包んで容易に語らなかつたものである。ペテロの純情ヨハネの智慧を以てしても、所詮彼等の期待する救主は榮光の君で、やがて聖國の來らんとし彼等は其の左右に侍するものと考へてゐた。然るに耶蘇の將來に對する豫言はあまりに暗く、基督の描かれし姿はあまりに慘ましかつた。ペテ



口は驚愕して耶蘇を引き止めた。

『主よ、然<sup>し</sup>あらされ、此事汝に起らざるべし。』

現世の成功は既に荒野四十日の試練に於て耶蘇の捨て去つた所である。然るに其と均しき誘惑が今最愛なる弟子の一人の口より發したのである。耶蘇は彼時と同じ激越な口調を以て一喝した。

『サタンよ我<sup>わが</sup>後に退け、汝は我が蹟物<sup>つづぎもの</sup>なり、汝は神のことを思はず反つて人のことを思ふ。』

かくて耶蘇は弟子達を顧みて、眞理と永生のために此世と戦ひて遂に殉すべき覺悟と決心とを懇ろに説諭した。『我<sup>わが</sup>に從はんと思はゞ己を捨て己が十字架を負ひて我に從へ。己が生命を惜む者は却て之を失ひ、我ために己が生命を失ふ者は之を得べし。聽け、人全世界を獲得すとも其生命を失はゞ何の益あらんや。又その生命の代<sup>しろ</sup>に何を與へんや。されど汝

等慰めよ、人の子は父の榮光をもて御使<sup>つかひ</sup>たちと共に來らん、其時おのくの行爲に隨ひて報いるべし。』

三人は始めて神の國に於ける救主と其使徒等の眞の姿と道に死すべき使命を悟り得たであらう。此點に開眼せられたる彼等は一週間ならずして靈界の風光に眼のあたり接する事ができた。馬太傳十七章の變容貌の記事は弟子達が耶蘇によつて一歩々々信仰の世界に深く導かれ行く消息を傳へて興味ふかきものである。思ふに耶蘇の一行はピリポ・カイザリヤより北を指して、古への詩歌に謳はれしヘルモンの秀峰が大空に青く聳えたるを望んでそゞろ山靈の招きを感じたであらう。福音記者ルカは「耶蘇三人を伴ひ祈らんとて山に登り給ふ」と録して居る。彼等<sup>ら</sup>は行く／＼泉湧く岩角のほとりに緑濃き森の中に、且祈り且教へられて、塵環を去ること遙かに、遂に頂を極めた。(此時の高山を傳説は南方タボル山として居るが道順や其他からヘルモン山とする方が面白い。)



山上に於ける祈禱静寂の數時、榮光の御姿、モーセとエリヤの出現、使徒等の驚異と隱栖の願望、輝雲に雷の如く響いた天聲、下山と山麓に於ける喧騒場面との對照等は眞に意味ふかい靈界の消息であるが、我等の筆は之を寫すにたへない。嘗つて畫聖チ、アンが此の天上の榮光と人世の喧騒とを一面の畫布に描いて神彩よく不朽の趣を傳へたが、讀者は須らく直接福音書を心讀して箇中の神秘を味會すべきである。

### 十、ユダヤ及ベレア傳道

秋の假慮の祭が近づいた。耶蘇の兄弟たちや多くのユダヤ人は都に上つた。併し耶蘇はガリラヤの分卦の君ヘロデヤ頑迷なる猶太教徒の前を避けねばならなかつた。彼は死を怖れるのではないが「時いまだ満たねば」つとめて人に現るゝを避けて、迂路サマリヤを経て「潜びやかに」上京した。道を行くとき或人耶蘇に來つて「主よ何處に往き給ふとも我

\*ヨハネ七  
章二以下

は従はん」と扈從を誓つた。耶蘇は答へて曰ふ。

『狐は穴あり空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なし。』

\*ルカ九章  
五八

祭の半ばを過ぎて耶蘇神殿に現れ、始めて都の中心に侃々の聲を振つて説法を試みた。節會に集つた人々は之を聞いて或者は其の知識と權威ある教法に感じ、或者は豈ガリラヤより預言者起らんやと蔑視した。パリサイ人や祭司の徒輩は下役を遣はして耶蘇を捕へんと機を伺はしめたが、彼等の間にも論議紛然として未だ手出するに至らなかつた。約翰傳七、八、九章に記録された事件や教法は此祭の前後に行はれたものである。ガリラヤに於ける如くエルサレムに於ても、耶蘇を信する者と耶蘇に敵する者との二種に分れて、「群衆のうちイエスの事によりて紛争がおこつた。」耶蘇は怖るゝ所なく自己の神來の權威、使命、永生に就いて語つた。殊に猶太人の聖祖アブラハムに比して、我は彼の在らざりし前より在るなりと宣した時は、反對者は憤激して「石をとりて耶蘇に擲たんと爲た」が、

ヨハネ傳  
七章四十

ヨハネ傳  
九章五十



彼は隠れて神殿を遁れ出た。

耶蘇の最後は既に半年を餘さぬ。されど「イスラエルの家の悉くに福音傳はらざる先に最後は來らない。」ヨルダン河東ベレアの地は未だ耶蘇の足跡の到らぬ所である。路加傳十章に記された七十人の弟子の派遣が若し實際に行はれたとすれば此時であつたと思ふ。其人數や行先は判然決定するわけに行かぬが、二人宛を一組にして自から往かんとする町々處々へ先立ち遣はされた。『收獲は多く勞働人は少し。往け、見よ我汝等を遣すは小羊を豺狼の中に入るるが如し』とは其時の餞けの語であつた。彼等はベレアは勿論、ヨルダン川を挟んで東西に、イスラエルの民に約束された神國の福音を宣べ、道途に遇ふに随つて病者を醫し惱める者に神の慰を傳へた。

耶蘇もやがて彼等の後を追うて自身ベレアの傳道を思ひ立つた。我等は斷片的なる福音書の記事により其道筋を明かに辿ることは出來ぬが、路加傳十一—十三章の記事は此の傳

道に於ける事件と教訓とであると考へて大差ない。此行は耶蘇三年の宣教に於ける掉尾の大傳道であつた。或所にては「無數の人あつまりて群衆ふみ合ふばかり」であつた。此の傳道に於ける彼の満足は下の挿話によく現はれて居る。曩に派遣せられた弟子達その任務を果し、喜び歸りて、「主よ汝の名によりて惡鬼すら我等に服す」と報告した。耶蘇は神は弱き弟子等をも用ゐ給うて斯くも福音の有效に傳へられたるを聞き、歡びの聲を擧げて言うた。

『我れ天より閃く電の如くサタンの落ちしを見たり。』

然れど弟子達には斯く戒めた、

『惡鬼の汝等に服せしを喜ぶな、汝等の名の天に録されたるを喜べ。』

同年冬宮潔の祭のとき耶蘇は再びエルサレムに上つた。其時神殿のソロモンの廊に於て端なく猶太人と大議論を戦はした。耶蘇が『我と父(神)とは一つなり』と宣べた爲に、猶



太人はこれを甚しき演言ヒガシキコトなりとして石にて撃ち殺さむとした。神の道を都エルサレムに傳ふるには到底最後の血を以てせねばならない。耶蘇は再び去つて、最初\*にヨハネの洗禮を施したる處に滞在して、ヨルダン河東一帯の地（ベレア）に傳道した。此の第二期ベレア傳道の事蹟は路加傳十三章の中頃より十七章、其他馬太、馬可、約翰の各福音書に散見せられる。耶蘇は既に最後の悲劇を覺悟し、時期の漸く迫るを感じてゐた。此時代の彼の談話を讀む者は宜しく彼と共に其の切迫せる境遇に身を置いて味讀せねばならない。「狭き門より入れよ」「救はるゝ者は如何に尠きかな」「招きたる者のうち一人だに神の夕餐ゆふけを味ひ得る者なし」、「我に従はんと思はゞ其の父母兄弟妻子、己が生命をも捨てざる可からず」等の語は當時の耶蘇の心境を窺ふに足るものである。一日パリサイ人等より「ヘロデ汝を殺さんとす」と告げられた時、耶蘇の答の如何に劇烈であつたかは最もよく此の消息を示して居る。

\*ヨハネ傳  
十章四十  
以下

『汝等\*ゆきて言へ、視よ我れ今日明日惡鬼を逐ひ出し病を醫し、而して三日目に完うせられん。されど今日も明日も次の日も我は進み行くべし。それ預言者はエルサレムの外にて殺さるゝことあらず……』  
一轉してエルサレムの爲めに長嘆して曰く、  
『噫、エルサレム！エルサレム！預言者たちを殺し遣はされたる人々を石にて撃つ者よめんどう。牛鶏めんどうの己が雛を翼のうちに集むる如く我なんちの子どもを集めんとせし事幾度ぞや、されど汝等は好まざりき。見よ汝等の家は捨てられて汝等に遣らん。』  
然れども耶蘇の心中の他の半面は神愛の暖かき思想に充ちてゐた。九十九の羊、放蕩息子の譬話等は此の頃に、やがて世を去るべき事を思ひつゝ弟子達になした慰めの教である。かの主禱を教へたのも此頃である。恐らくヨハネの洗禮を施し、所に赴いた時、弟子の或者が、嘗つてヨハネが其弟子に祈禱を教へた事を憶ひ出して、耶蘇に願つたのであらう。

\*ルカ傳十  
三章卅一  
以下

ルカ傳十  
一章一以  
下



耶蘇は直ちに一定の祈禱の語を教へ、更に彼等を勵まして祈禱生活に精進すべき事を勧めた。

『父たる者誰か其子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや、況して天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや……。求めよさらば與へられん、尋ねよさらば見出されん、門を叩けさらば開かれん。』

曩きにガリラヤにて分袂せし使徒等も此頃前後して耶蘇の許に歸つて來たと思はれる。

耶蘇は彼等に最後の時迫るを告げて『蹟物キヅモノは必ず來らざるを得ず』と警告した、使徒等は今更の如く弱き心を省みて『我等の信仰を増し給へ』と願うた。イエスは勵まして曰ふ、

『若し芥種カイシノタネ一粒ほどの信仰あらば、此の桑樹に「抜けて海に植はれ」と言ふとも汝等に從ふべし。』

思ふに此頃の耶蘇は使徒の教育に最も力を盡したのであらう。思へばガリラヤの野人を

\*ルカ傳十  
七章一以

選んで之に神國の理想を吹きこみ、使命の重きを自覺させ、之に耐ふる力を漸次に養ひゆきて遂に匹夫を勇者となし、現世的野心や慾望を捨て、一路饑餓、漂泊、苦難の道を進む聖徒たらしめた耶蘇は、世界最大の教育家ではあるまいか。併し茲にいたる迄の困難、忍耐、熱意、愛情は我等の想像し得る以上であつたであらう。

## 十一、エルサレム行

耶蘇が死の旅への發足は彼の深い人間愛から起された。エルサレムの近郊ベタニヤにあるマルタ、マリアの一家は、曩に耶蘇の上京せし時道を聽いて以來全く彼に歸依し、耶蘇も亦優しき姉妹や其弟ラザロの愛すべき性質を格別に愛したやうである。然るに恰も此時ラザロは重き病に罹つたので姉妹は人をして耶蘇の許に「汝の愛し給ふ者病めり」と言ひ送つた。耶蘇は二日間靜思祈禱の後「我等またユダヤに往くべし」と弟子に告げた。使徒

\*ルカ傳十  
三章八以

ヨハネ傳  
十一章一  
以下



等は師を思ふのあまり切に諫止した。

『ラビ、此程もユダヤ人汝を石にて撃たんとせしに復かしこに往き給ふか。』

されど耶蘇の心は既に決して居る。「我等の友ラザロ眠れり、我よびさまさん爲に往くべし」と主張したので、弟子の一人トマスは決然として同輩を誘うた。

『我等も往きて彼と共に死ぬべし。』

斯くて耶蘇は愈々ユダヤへと向つたのである。ペタニヤへの到着、ラザロの死と人々の嘆き、基督の慰問と更生等の物語は、其時随伴せる使徒の一人ヨハネの筆によつて見るが如くに描寫されて居る。併しラザロを蘇生よみがへらした事は果して使徒等の憂へた結果をもたらした。其場に居合せた猶太人の或者は、直ちに走せてパリサイ人に耶蘇の奇蹟を告げた。パリサイ徒は祭司長を促がしてサンヒドリン會議を召集した。議員の多くは現代主義のサドカイ人等である。斯かる者を棄ておく時は民みな奇蹟を見て彼を信するに至り、羅馬兵

はまた是を一揆の類と見做して是が鎮靜を口實に我等の國土をも人民をも奪ふに至るべしと言ふ考から、宗教的立場で耶蘇を弾劾するパリサイ人に和して、彼を殺す事に決定して了つた。此年の大祭司であつたカヤバも此の決議に賛成したが、さすがに事理を辨へた言をなして居る。「汝等は何事をも了解してゐない、自分の都合や嫉妬から之に賛成したのであるが、其實此人の死するは民の爲に一人死して國人すべて滅びざらむためである」と。福音記者ヨハネは此の言葉を大に稱揚して、耶蘇の死は萬民に眞生命を與へる所以なりてふ靈的意義を不識の間に豫言したものだとして居る。兎もあれ此日よりしてパリサイ、サドカイの徒は耶蘇を捕へて殺さんとしたが、此度は耶蘇は都に入らず、其まゝ引き返して荒野に近きエフライムの方に退隠して姑く神の定め給ふ時期のいたるを待つた。

耶蘇三年の宣教は此期を以て最後とする神國の到來に就ての談話、祈禱の態度に就ての教話、婚姻に關する教訓、天國を葡萄園に働く事に譬へたる話等は此頃に語られたもので

\*ヨハネ傳 十一章四  
ヨハネ傳 十一章五  
ルカ傳 十章廿一  
ルカ傳 十章廿二  
ルカ傳 十章廿三  
ルカ傳 十章廿四  
ルカ傳 十章廿五  
ルカ傳 十章廿六  
ルカ傳 十章廿七  
ルカ傳 十章廿八  
ルカ傳 十章廿九  
ルカ傳 十章三十  
ルカ傳 十章三十一  
ルカ傳 十章三十二  
ルカ傳 十章三十三  
ルカ傳 十章三十四  
ルカ傳 十章三十五  
ルカ傳 十章三十六  
ルカ傳 十章三十七  
ルカ傳 十章三十八  
ルカ傳 十章三十九  
ルカ傳 十章四十  
ルカ傳 十章四十一  
ルカ傳 十章四十二  
ルカ傳 十章四十三  
ルカ傳 十章四十四  
ルカ傳 十章四十五  
ルカ傳 十章四十六  
ルカ傳 十章四十七  
ルカ傳 十章四十八  
ルカ傳 十章四十九  
ルカ傳 十章五十  
ルカ傳 十章五十一  
ルカ傳 十章五十二  
ルカ傳 十章五十三  
ルカ傳 十章五十四  
ルカ傳 十章五十五  
ルカ傳 十章五十六  
ルカ傳 十章五十七  
ルカ傳 十章五十八  
ルカ傳 十章五十九  
ルカ傳 十章六十  
ルカ傳 十章六十一  
ルカ傳 十章六十二  
ルカ傳 十章六十三  
ルカ傳 十章六十四  
ルカ傳 十章六十五  
ルカ傳 十章六十六  
ルカ傳 十章六十七  
ルカ傳 十章六十八  
ルカ傳 十章六十九  
ルカ傳 十章七十  
ルカ傳 十章七十一  
ルカ傳 十章七十二  
ルカ傳 十章七十三  
ルカ傳 十章七十四  
ルカ傳 十章七十五  
ルカ傳 十章七十六  
ルカ傳 十章七十七  
ルカ傳 十章七十八  
ルカ傳 十章七十九  
ルカ傳 十章八十  
ルカ傳 十章八十一  
ルカ傳 十章八十二  
ルカ傳 十章八十三  
ルカ傳 十章八十四  
ルカ傳 十章八十五  
ルカ傳 十章八十六  
ルカ傳 十章八十七  
ルカ傳 十章八十八  
ルカ傳 十章八十九  
ルカ傳 十章九十  
ルカ傳 十章九十一  
ルカ傳 十章九十二  
ルカ傳 十章九十三  
ルカ傳 十章九十四  
ルカ傳 十章九十五  
ルカ傳 十章九十六  
ルカ傳 十章九十七  
ルカ傳 十章九十八  
ルカ傳 十章九十九  
ルカ傳 十章一百



あらう。嬰兒を祝せしこと、富める青年への警告等も此頃の事であらう。斯かる間に、壓迫の黒き影は色濃く耶蘇の身邊に迫つてきた。固より彼は、古來凡ての預言者義人は世に容れられず憐ましき迫害を受けて終に犠牲の死をとぐべき運命を負ふ者なることを知悉して居る。彼は弟子を教育し心謙れる者を救に導く間に愈々時の來れるを感じ、一窺に十二弟子を呼んで道すがら言ひ給うた。」

『見よ我等エルサレムに上る。人の子は祭司長學者等に付されん、彼ら之を死に定め、また嘲弄し鞭ち十字架につけん爲に異邦人に付さん。斯て彼は三日目に甦るべし。』

耶蘇は十二使徒を隨へて愈々エルサレムへの行程に上つた。再び春が訪れて時は過越の節に近い。懐かしきガリラヤの春、幼年時代より彼は此の過越祭に上る春の旅を幾回續けた事だらう。しかも此度は躬ら過越の羔羊として屠られむがためではないか。「イエス天に擧げらるゝとき満ちんとしたれば御顔をかくたくエルサレムに向け、使徒達も默然として悲

マタイ傳  
十九及十六  
以下  
マタイ傳  
廿三章卅  
以下  
マタイ傳  
廿章十七  
以下

壯な心地で歩を運んだ。途にエリコの古城を過ぐるとき、城門の外に座してゐた盲乞食の熱心を見て其眼を開き、町の中にて税吏長ザアカイの求道の念あつきを見て其家に宿りて示教し、翌日山路険しいエルサレムへの道を登り、一と先づベタニヤなるラザロの家に足を留めた。一家は愛師の再訪を迎へて祝筵をまうけて喜んだ。併し此の歡びも東の間、耶蘇こたびの上京は最後の受難のためと聞いた彼等の悲はいかに深かつたであらう。殊に初めて教を聽きし此かた信仰の道一すちに清き心を捧げて耶蘇に事へたマリヤは、かねて蓄へ置きし價高き混りなきナルドの香油を耶蘇の頭に注ぎ、また足に塗りて己が頭髮もて拭ひ、哀別の誠を示した。されば耶蘇も、ただ冷かなる計理の外に人の純情を解し得ぬユダの言葉を斥けて、

『此女はなし得る限をなして我體に香油をそゝぎ、豫め葬りの備をなせり。誠に汝等に告ぐ、全世界何處にても福音の宣傳へらるゝ所には此女の爲しゝ事も紀念として語らる

マタイ傳  
ヨハネ傳  
十二章十一  
マコ傳十  
四章三



べし。』

耶蘇の茲に留り居る事が早くも人々に傳へられて、祭のために出京した民衆が次第に集つて來た。エルサレムの市民やユダヤ人にも彼を信する者が殖ゑてきた。祭司長バリサイ徒等は驚いてラザロをも殺さんと議るに至つた。耶蘇は此一家に禍の及ぶを慮つて此處を去る事に決し、二人の使徒を遣はして一疋の驢馬を引き來らせ、之に打ち乗つて、昔豫言者の謳ひし平和の王の姿して、シオン山、神の鎮居ましますエルサレムの都城へと進み入つた。かねて耶蘇の名聲を聞き、又は其教に服し、猶太人、折から都に居合せた遠地からの參詣人等は、手にく棕梠の小枝を持ち、衣を道に布いて、歡呼して迎へた。

『ホザナ、讚むべきかな、主の御名によりて來る者、イスラエルの王！』

まさに是れ、紀元廿九年の春深き過越祭前五日の日曜日の事である。

ゼカリヤ  
書九章九

ルカ傳十  
九章三十  
八

## 十二、受 難 週

我等は愈々耶蘇が地上生活の最後の週を叙する事とはなつた。先づ耶蘇が捕へらるゝに至る迄の順序を手短に述べて置かう。サドカイ人等が平素犬猿の間柄なるバリサイ人と與みて耶蘇を捕へんとする動機は前に説いた。バリサイ徒が耶蘇を殺さむと欲するは、耶蘇が彼等の信仰傳統を無視するより起つた反感であることも既に分つた。唯だ彼等が耶蘇を捕へむとして猶ほ躊躇せざるを得ないのは民衆の意向である。此時過越祭のために遠くガリラヤ、ベレア地方から上京して居る者も澤山ある、彼等の中には嘗て耶蘇の教法を聽き、其の行蹟を見、其の人格的迫力に接して、彼に信服したものが多數ある。ユダヤ人中にも彼の信奉者が、ラザロの蘇生事件此かた著るしく増加して來て居る。耶蘇一人を捕へた爲に是等の者が一時に騒ぎ立つは事勿れ主義のサドカイ派の最も愉るゝ所である。耶

ヨハネ傳  
七—十章十  
九



蘇が入京の翌日神殿の庭に巢喰ふ商賈の輩を一掃したとき彼等が拱手傍觀したのも是の故である。其翌日神殿に於て教法を宣ぶるとき、「汝何の權威を以て是等の事をなすか」と詰り問ひながら、機智に富む耶蘇の答に敢て手を下し得なかつたのも此の爲である。されば耶蘇は危険を前に控へつゝ猶ほ多くの教を此際になす事を得たのである。馬太傳廿一—廿三章に含まれたる様々の教は此時に語られたものと見てよい。

斯くて民心はいよゝゝ耶蘇に歸するばかりである。反對黨は謀議して耶蘇の失言を捕へて之を口實に彼を陥れんと企てた。先づ最初に此役を引受けたるはヘロデ黨の輩である。彼等は耶蘇の許に來つて、針を隠して面を和げつゝ問ひ試みた。

『師よ、我等は知る、汝は眞にして眞をもて神の道を教へ、且つ誰をも憚り給ふことなし。されば我等に教へ給へ、貢をカイザルに納むるは可きか悪しきか……』

耶蘇は彼等の奸計を察し機智を以て之に應じた。デナリ一箇を取寄せて其の刻まれたる

マコ傳十五  
以下  
一章廿七

マタイ傳十  
以下  
二章三  
節以下  
九章廿

像を誰かと反問し、「カイザルなり」との答を待つて、嚴乎として言渡した。

『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ。』

耶蘇を羅馬帝の謀叛者にせむとした彼等の奸計はおぞくも失敗したので、次にサドカイの連中が耶蘇の前に現れた。彼等は元來猶太教の復活の教理を信ぜぬのであるが、此時は平素の考を隠して耶蘇を返答に窮せしめんと試みた。

『師よ、モーセは「人若し子無くして死なば其兄弟かれの妻を娶りて世嗣を擧ぐべし」と言へり。茲に七人の兄弟あり、長子妻を娶りて死に、其二、其三、七人の兄弟みな此婦を娶りたれど子無くして死し、終に其婦も死にたり。されば復活の時その婦は誰の妻となるべきか。』

『此世の子らは娶り嫁ぎすれど、彼世に入り甦るに足る者は娶り嫁ぎする事なし。是れ天使に等しく復活の子にして神の子たればなり。それ神は死にたる者の神に非ず、活



ける者の神なり……。』

是れまた耶蘇が明快に解答を與へたので彼等は驚いて引き下がつた。最後にパリサイ徒は、耶蘇がサドカイ人を説き伏せたと聞き、集議して律法に精通しき一人の教法師を彼の許に送つて質問せしめた。

『師よ、律法のうち何れの誠命か大なる？』

耶蘇は言下に激ます答へた。

『汝心を盡し精神を盡し思を盡して主なる汝の神を愛す可し、是れ第一にして大なる誠命なり。第二もまた是に等し、己の如く汝の隣を愛す可し。律法全體と預言者とは此の二つの誠命に據る。』

反對黨に依つて提出された質問は却て耶蘇から、基督教徒の國家生活の原則、永生の眞理、道德生活の基本等の重要な教を引き出す鍵となつた。「其日より敢て復問ふ者なかりき」

と録されてある通り、反對者は明かに敗北して一時影をひそめ、耶蘇の教説は是より一層大膽に強烈に宮のうちに巷のなかに聞かれた。かの學者パリサイ徒の偽善を痛烈に責め、終の日の峻烈なる審判的光景を説かれたのは此時である。「民はみな教を聽かんとて朝とく宮にゆき」耶蘇の來るを待つた。イエスは夜は多くオリブ山に宿つた。彼を待つにベタニヤの暖かき家庭があつたけれども、迷惑を彼等に與へない心遣と、靜思祈禱のために此山を選んだのであらう。

十二使徒の一人にイスカリオテのユダなる人物がゐた。彼の性格と行動は今なほ不可解の雲にとざされて居る。十二使徒の多くがガリラヤ生れなる中に彼一人ユダヤ生れであつた。素朴直情なガリラヤ人の中に、理屈つぽく金錢に細かい數理的な彼は肌が合はなかつたらしい。彼は教團一行の財囊を保管するものであつたが、折り／＼其中から金錢を掠めたと使徒の一人ヨハネは書き残して居る。また現世的救主を耶蘇に期待する點に於て彼は



恐らく弟子中の最たる者であつたらう。彼が耶蘇に随つたのも斯かる思から、耶蘇に従ひをれば聽て神國實現の曉に己も名譽ある一地位を占め得ると考へた爲かも知れぬ。此の見方から一部の學者はユダの反逆を下のやうに解釋して居る。即ち彼が其師を敵に賣つたのは耶蘇を眞に非凡の救主<sup>メシア</sup>と考へたからで、敵手に落ちた其時神子たる彼は異常の能力を現はして一舉に敵を滅盡し神國は立ちどころに實現せむ、若し彼が異能を示す能はずして敵手に死するならば彼はまさしく天下の大欺瞞者にして十字架の最後は自業自得なるべし、結局何れの結果に出ても耶蘇を敵に賣つて差支ないと思つた故だと言ふのである。此の推察が當れるか何うかは分らぬ、何れにせよユダの人物が不可解であると共に、彼が其師を賣つた動機も千古の謎である。我等は彼も亦秘密なる運命の兒として、神秘的記者ヨハネと共に「サタン彼に入りたり」として置く。

水曜日、即ち過越と除酵祭の二日前、耶蘇は神殿の入口にて、レブタン二つを献げし貧し

ヨハネ傳  
二十三章  
二、廿七

き寡婦の心を賞し、壯麗なる石と獻物にて飾られたる宮を誇る者等に「一つの石も崩されずして石の上に残らぬ日來らん」と警告し、使徒ピリポの紹介によつて來りし希臘人につらく永生の福音を説いて居る間に、彼に對する詭謀は陰に於て其の黒き手を擡げた。此日祭司長學者等がイエスを捕ふべき手段を議してゐる處へ、ユダが師を賣りにやつて來た。「祭の間は爲すべからず、恐らくは民のうちに亂起らん」と言ふ延期説も出たが、今其の門下から内應者が出た以上は速かに決行するに若かずと凝議一決して、ユダには銀三十を報酬に與へて召捕の手筈をさだめた。

十三、ゲツセマネ

愈々、聖悲劇の序幕は翌くる木曜の夕から開かれる。猶太風に日を數へれば既に金曜日過越の第一日に這入つた夜である。耶蘇は或家の二階座敷(傳説によればマルコの母の家)

ルカ傳廿一章以下  
ヨハネ傳十二、廿以下  
マタイ傳廿六章五







夜深くして、使徒等は晝の疲れ堪へがたく其場に眠つて了つた。耶蘇は一たび、二たび祈禱の座を立つて彼等呼び醒し、惑まどに入らぬやう共に祈れと命じた。彼自身天地の間に限りなき孤獨を感じたであらう。三たび歸つて天に訴へ地に伏した。「いよく切に祈り給へば汗は地上に落ちて血の滴したりの如く」であつた。嗟呼、此の祈、此の光景こそは人間の魂の歴史のなかに最も崇高、嚴肅、神聖を極めたものであつた。其の苦痛は肉體以上の苦痛である。其の祈禱は人類を代表して天地の大靈に抱いだきついた神人の合一である。カルワリーの十字架は彼の魂に其影を投げて、永遠に神と離れ行く亡びの子らを語つてをる。肉體の死は忍ぶべし、世の罪を擔うて神に歸らんとする重荷おもの重いかな。「基督は肉體にて在ししとき、大なる叫と涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを獻げ、その恭敬こうけいによりて聽かれ給へり」とは聖書記者の言葉である。彼は天の聖意がいよく成るを感じた。席をたち弟子等呼び起して、

ルカ傳廿  
四章四節

ヒブル書  
五章七節

『時は至れり、見よ、人の子は罪人等の手に付つさるゝなり。立て、我等往くべし。』  
此時、豫かほて此の場所を知るイスカリオテのユダは劍と棒とを携へた兵卒を連れて森に入り來り、いま自分が接吻する相手は耶蘇ぞと謀しめして、兵卒を待たせて一人進んで來た。炬火、劍光は樹間に動いて居る。耶蘇の眼はユダを射た。

『ラビ、安きか。』

嗚呼、かく言ひつゝ、反逆者は愛の象徴たる接吻を以て遂に師を賣つたのである。耶蘇は兵卒の進むを待たず自若として其れに進み出でた。

『汝等誰を尋ぬるか。』

『ナザレのイエスなり。』

『我はそれなり。』

耶蘇の泰然たる高姿に兵卒は後退あとひきして地に畏伏した。



『誰をたづぬる乎。』

『ナザレのイエスを……。』

『我は夫なりと既に告げたり、汝等我一人を求むるならば此人々(使徒)の去るを許せ。』  
使徒たちは散り去つた。耶蘇は縛せられて兵卒に引かれた。塹に息む森の鳥は時ならぬ  
夜の響に聲をあげて啼いた。

#### 十四、十 字 架

審判は深夜直ちに祭司長の庭内に開かれた。祭司長を中心に、サンヒドリン議員、學者  
バリサイ徒等居列ぶ。中庭には兵卒下僕ども火を焚いて暖をとり、秘かについて來たベテ  
ロは火に暖まつてゐた。訊問は開始され、議員等連りに耶蘇を死刑にすべき罪科を擧げむ  
としたがない。耶蘇を憎む輩は様々に言ひ罵るけれども皆な區々として讒訴する所一定し

ない。耶蘇は黙然として立つ。祭司長カヤバ直接イエスに問ひ試みた。

『我れ汝に命ず、活ける神に誓ひて我に答へよ、汝は基督、神の子なるか。』

確く結んだ耶蘇の口は開いて、鐵の如き信念の聲カヤバの耳朵を打つた。

『汝の言へる如し。汝等、人の子の全能者の右に座し、天の雲に乗り來るを見む。』

自ら神の子と稱する如きは此上なき冒瀆の言、身苟くも猶太教の最高位にあるカヤバ、  
自分を侮辱されたかの如く感じ、衣を裂いて憤然一座を見廻して叫んだ。

『彼れ瀆言を云へり、何ぞ外に證據を求めん、見よ汝等も瀆言を聞けり、いかに思ふか』  
彼等こぞりて罪まさに死に當ると陳べた。併し人を死刑に處する最後の權は羅馬政府の  
握る所である。議員等は總督ピラトの承認を受けねばならない。耶蘇を嘲罵し、唾きし、  
面を撃つて夜の明くるを待つた。

明くれば金曜日朝エルサレム城内幾萬の市民除酵祭の祝に忙はしき時、耶蘇は曳かれ



て羅馬公廳ピラトの邸に至つた。議員等は祝祭の前に異邦の公廳に入るは身汚るとて中に這入らず、入口にて耶蘇をピラトに付し、巧みに彼の怒を招く如き口實を構へて訴へた。

『此人は民を惑はし、貢をカイザルに納むるを禁じ、且つ自ら王なるキリストと稱ふ。』

ピラトは公廳内にイエスを呼び入れて質問して見たが、彼の關知しない猶太宗教上の罪はともかく、羅馬の法律に背く罪過は認め得られない。彼の妻もまた此義人に關はる勿れと夫を諫めた。ピラトは彼を許さんと考へて猶太人の前に現れ、「我れ此人に罪あるを見ず茲に毎年此の祝祭に一人の囚人を赦す例あり、汝等此人を許さんと思はざるか」と質ねたところ、彼等一齊に「否な此人に非ず、バラバを許せ、バラバを許せ」と叫んで止まない。ピラトは到底此まゝで熱狂せる猶太人に事理を悟らす事ができぬと察し、耶蘇に相當の答刑を加へて熱したる彼等の心を鎮め、徐ろに彼を赦さんと考へ、番卒に命じて棘の冠を耶蘇の頭に載せ、紫の袍衣を着せて外に引き出し、鞭つて、猶太人に言うた。

\*ルカ傳廿三章一節以下

マタイ傳九章十

ヨハネ傳十九章一節以下

『此人を見よ、我れ罪あるを見ず。』

祭司長議員等一齊に十字架に付けよ、十字架に付けよと叫ぶので如何とも仕様がなない。正しい事に従ふよりも其場其場の無事安隱を計るは政治家の常である、ピラトは如何に處理すべきや惑うてゐたとき、議員の一人が此の羅馬行政官の心に最後の釘をさした。

『汝若し此人を許さばカイザルに忠臣ならず、凡そ己を王とする者はカイザルに叛くなり。』

ピラトは遂に耶蘇を十字架に釘ける事を許し、祭司長議員等に彼を渡した。

ニサンの月十四日は猶太人の大祭日で、全國より集つた猶太人は皆な、犠牲の羔羊を神殿の庭の祭壇に屠つて彼等の罪祭の献物とするのである。されど此日更に大なる萬民の爲の罪祭の献物が、エルサレム城北なるカルブリー丘上に其の犠牲の血を流したのである。春草滿地を掩うて風そよぐ丘上に、三基の十字架が立てられた。耶蘇を眞中に、其の左



右に二人の盜賊が釘けられた。兵卒共や猶太人は架上の耶蘇を罵つて言うた、「殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、汝若し神子ならば自らを救へ」と。遙かに隨ひ來りし婦人たち、耶蘇の母などは釘うたれし手足より滴る血潮を見て如何ばかりか心を痛めたであらう。家を出で、三年、野に伏し山に祈り、故郷人に狂者と呼ばれつゝ東西に奔走した耶蘇も、いま生母マリアの傷心の姿を見ては何より辛く感じたであらう、恰も茲まで隨いて來た愛弟子ヨハネの姿を認めて、之に愛母の後事を托した。

耶蘇の死苦は晝の十二時より凡そ三時間ほど續いた。最後に「事畢りぬ」と述べて、靜かに靈を天に渡した。まさに是れ、紀元廿九年の春、猶太曆アビブの月（或はニサン、正月なり）十四日は、我が春季皇靈祭後に來る満月の前日に當るのである。

## 十五、復 活

日暮れてアリマタヤのヨセフと呼ぶ、かねて耶蘇に歸依してゐた一富人がピラトの許に往つて、屍を十字架より取り下して己が墓に葬ることの許可を願ひ出た。猶太の墓は豎に孔を穿つて埋め盡すのではなく、丘腹に人の出入し得る程の横洞を掘つて、其の最奥に屍體を寢せて置くのである、今ヨセフは自己のために用意しておいた立派な墓所を耶蘇の爲に提供したのだ。彼および數人の信徒たちは、耶蘇の屍體を猶太の例にしたがつて丁寧に布に包み香を塗り、靜かに土の香高い新墓の奥に横へた。入口には石の重い戸を閉して、其夜は羅馬の兵卒等、或は耶蘇の屍を盗み出す者やあらんと嚴重に警衛した。

翌くる日、猶太人の安息日（土曜）は事なく暮れて、日曜のあした、さすがに篤き信と愛とを寄せた信徒たち、中にも嘗て七つの惡鬼を追ひ出されしマグダラのマリアを先頭に數人の婦人達は、香料を用意して墓所を訪れると、驚く可し、耶蘇の屍は見えずして包みし白布のみそこに残つて居た。彼女等は驚いて之を使徒ペテロとヨハネに告げた。彼等は



初め何人か主の屍を奪ひしものと信じてゐたのである。

然るに、猶ほ墓の前に嘆いて居たマリアに先づ神々しい耶蘇の復活體が現れた。福音記者ヨハネは其時の模様を極めて寫實的に<sup>1</sup>かき記してをる。次で、弟子達に見え、<sup>2</sup>エマオ途上の二人の旅人に現れて共に語り、後に使徒等の集つて居た所に其の復活の姿を現して、<sup>3</sup>疑ふかいトマスに其肉體の傷の痕に<sup>4</sup>觸らせるに及んで、耶蘇の復活は弟子達の間に確く信ぜらるゝに至つた。我等は今こゝに耶蘇の復活の虚實を論ずる意志はない。唯だ、弱かりし使徒等が一變して信念の勇者となり、死を恐れずして各地に復活の信仰を鼓吹して歩いた事は疑ふことが出来ぬ。洵に初代基督教徒の傳道説教の主題は「基督の復活」であつた使徒を選定するにあつて第一の要件は、彼が復活の基督を實見したることであつた。『基督復活せずば我等の宣教は空しく、信仰も空しからん』とは最初の目撃者、初代基督教徒を通じての動かしがたい信仰であつたのだ。

<sup>1</sup>ヨハネ傳 廿章一節

<sup>2</sup>同十九節以下

<sup>3</sup>ルカ傳廿四章十三以下

<sup>4</sup>ヨハネ傳 廿章廿六節

\*使徒行傳 四章二、三、六節

○使徒行傳 一章廿二節

○コリント前書十五章十四節

基督は復活の後四十日間、屢々弟子達に現れて彼等の信仰を固め、教をなした後、遂に天上の榮光の座に歸すべく昇天した。エルサレムの東、オリブ山に續くガリレイの小さな峯は昇天の箇所と傳へられて居る。耶蘇は此處に十一人の使徒を招き、萬國に往きて福音を傳へバプテズマを施すべき事を命じ、彼等を祝福するや、輝雲天に起つて耶蘇の體を擧げ、仰ぎ立つガリラヤ人を下に、遂に見えずなつたと記されて居る。

以上はナザレの耶蘇が短かき、さりながら異常なりし生涯のあらましである。絶えず彼に隨伴し、實見者の態度を以て福音書を書いた使徒ヨハネは、其の著書を結ぶに下の語を以てして居る。

『此等の事を録し、は、汝等をして耶蘇の基督なることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲めなり。』

\*マタイ傳 廿八章九節

○使徒行傳 一章七節以下



## 第三章 耶蘇の自覺

耶蘇の自己意識や其の所教に就いては別に一卷の書を編んで『耶蘇の教説』として詳説すべきであつて、此の小篇のよくなる所でない。併し耶蘇を傳するに當つて、表面に現れた彼の卅三年の生活を記すのみでは、未だ基督教の始祖イエスを描き盡したとは言はれない。所謂『基督教は基督』其者であつて基督の教訓ではないとすれば、我等は此書を終る前に許す限りの簡単な程度を以て、耶蘇の内面の意識——自覺について一わたり觀察を試み、以て内外より耶蘇を觀察すべきであらう。げに彼の「衷なる人」を知らずしては外面の行動をも眞に理會することが困難であらう。

耶蘇の意識のうち最も強く深く占めた思想は「我は神の子なり」てふ一個の自覺である。

彼がヨルダン河畔に洗禮を受けたとき天に聞いた聲は實に、「是は我が愛む子、我が悦ぶ者なり」との一語である。福音書を精しく調べた人は、耶蘇が神を呼ぶに『我が父』または單に『父』なる稱呼を以てし、決して『我等の父』なる語を用ゐず、他の弟子または一般人に向つては『汝等の父』なる語を當て用ゐて居る事を發見するであらう。かの『天に在ます我等の父よ』なる祈禱句は弟子達に祈るべき言葉を教へたので、彼自身の祈ではない。是は明かに耶蘇が神と自己との特殊な個人的關係を表示せんとした用意に外ならない。彼はまさしく自分は常人とは全く異なる「神の獨子なり」との強き自覺を抱いてゐたのである。

耶蘇が神に對して斯く親しい父子の感情を抱いたのは恐らく洗禮の時より以前からであらう。ナザレの故村に美しくしき自然にしたしみながら彼は無限の思を天父の懷に寄せたであらう。十二歳のをりエルサレムに殿詣して歸るを忘れた時、其の父母に答へた言葉——



「我は我父の家（神殿）に居るべきを知らぬか」——は少年耶蘇の心内の消息を語つて居る。斯かる自覺に充ちた彼にして始めて「子を知る者は父の外になく、父を知る者は子の外になし」と言ふ密接なる父子相識の信念に基く言をなす事が出来たのである。重ねて言ふ耶蘇が神を父と呼んだのは、弟子達に天父の思想を鼓吹したのとは意味が違ふ。

既に耶蘇は天父の獨子である。子は父の業をなすは當然である。若し此世の人に「神國を賜ふことが天父の御意」とすれば、神の獨子はまさに此の目的を遂ぐるために此世に遣はされたものであらねばならぬ。茲に耶蘇の救主なる觀念が生じてくる。耶蘇は先づ我は何者であるかの意識から、自己の目的を自覺したのである。言ひ換へれば使命の自覺が神子の自覺を生んだのでなく、神と彼との間に結ばれた父子の意識が使命の自覺となつたのである。實に「我を遣はし給へる者の御意を行ひ其の御業をなしとぐるは是れ我が食物なり」とは耶蘇本來の面目である。

ルカ傳二章四十九

マタイ傳七十一章廿

ルカ傳二十章卅二節

ヨハネ傳四章卅四

既に耶蘇は救主の自覺に立つて居る。然らば耶蘇の救主觀念は如何なるものかを次に考へて見ねばならぬ。思ふに耶蘇の救主思想と聲息を通ずる者は、かのイザヤ書中に存する有名な「神の僕」歌であらう。耶蘇は當時一般に考へられたる猶太的救主觀念を極力打破したが、彼さながらの人格的表現を右の詩歌にうたはれた「神の僕」の人格に見出したのである。今左に右の歌の一部を録するは、耶蘇の思想を理解するために必要な事であらう。

—

我が僕を見よ、彼は我が扶くる者、

我が選び人、我が心喜ぶ者なり。

我れ我が靈を彼に與へたり、

彼れ萬民に道を示さん。

彼は聲高く叫ばず、吼えず、

イザヤ書一節以下

（現行日本語譯聖書に於て）



其の聲を街頭ちまよに聞えしめず。

傷める葦を折ることなく、

ほのくらしき燈火ともしびを熄ひすことなし。

至誠まことをもて彼れ道を示さん、

彼は衰へず、喪膽きかちせざるべし、

道を地に立て終るまでは——。

かくて諸々の鳥は法音を待ち望まん。

二

彼は侮られて人に捨てられ、

悲哀かなしみの人にして病惱なやみを知れり。

顔を掩ひて避くる醜人の如く——

イ\*  
五十三  
一六章  
三節

蔑まれぬ、我等も彼を尊まさりき。

されど彼こそ我等の病惱なやみを負ふなれ、

彼こそ我等の悲哀かなしみを擔になふなれ。

然るに我等は思へり、——彼はせめられ

神にうたれて苦めらるゝなりと。

我等はみな羊の如く迷ひ往けり、

おのがじし己が道に向ひゆけり。

然るに神は彼の上に負はせたまへり、

我等の凡ての背戾不義を——。

此の歌は耶蘇の幼時より愛誦したものゝ一であらう。既に神の子、神の悦ぶ者と信じた  
る彼は、萬民に道を傳ふる事こそ我が使命なれと感じ、至誠を以て、不撓不屈、最後まで



傳教のために奮闘したのである。耶蘇の此の決心と勇氣とは不用意に記された福音書の記事中にも屢々發見し得る。而して此の使命を果す者は此世に於ては失敗の人でなければならぬ、彼は侮られ蔑まれて人に捨てらるゝ運命を最初より覺悟してゐた。彼は常にエルサレムに於て受くべき悲惨なる最後を弟子達に語り聞かせたのである。然かも此の「悲哀の人」にして始めて人の悲哀を慰め得べしとは彼の所信である。彼が多くの病者不具者を癒したことも、世の「病惱を負ふ」神の僕としての外部に現れた「徴」である。「健全なる者は醫者を要せず唯だ病ある者これを要す、我は正しき者を招かんとにあらで罪人を招きて悔改めさせんとて來れり。」凡て勞する者重荷を負ふ者は我に來れ、我れ汝等を休ません」とは耶蘇の己が使命に對する信念である。而して此の信念の最も高潮に達したものは實に『人に事ふることをなし、多くの人の贖償として己が生命を與へんためなり。』と云ふ耶蘇の言葉である。しかも此の思想もまた「神の僕」歌のなかに發見さるゝもので

\*ルカ傳五章卅一節

マタイ傳十一章廿八

◎マタイ傳廿章廿八

ある。讀書は若し勞を厭はず舊約聖書イザヤ書第四十二章以下五十三章に散見するエホバの僕しもべに関する豫言——原文は美しき韻文なり——を讀むならば、如何に耶蘇の言行と生涯とに照應するもの多きかに驚かるゝであらう。要之、耶蘇の内部意識は神子の自覺に始まり、次で使命の自覺となり、此の使命を果すために多くの苦難を経べく、而かも此の苦難——死に由つて萬民を救ふと信じたのである。彼は此の信仰を以て道を傳へ、此の自覺を以て十字架の死を甘受したのである。而して初代信徒等は如是耶蘇を信仰して基督と稱へたのである。

耶蘇が神を明かに活きた實在者と見たことは今更ら架説を要しない。當時の猶太教に於てもまた神を實在者と見做した。併し彼等の神は猶太國家の運命と離すことの出來ぬ性質を帯びて居る。隨つて耶蘇在世の時代の如く國家全く滅びた際には潑刺たる神の活性が薄



らがざるを得ない。加ふるに猶太民族の不信のために速ざかりし神の恩寵を挽回するには神の律法を缺けなく實行せざる可からずと、徹頭徹尾律法主義に立てこもつた當時の猶太教に於ては、勢ひ神は律法の背後に押しやられて其の活性が表面に現れて來やうがない。是れ當時の猶太教が先きの王朝時代の信仰に比して遙かに神の實在性を缺いてゐる所以である。

然るに耶蘇にとつては、神はすべての律法的籬牆を徹して直ちに眼前に迫つて居る實在者である。彼が殆んど手にとる如く「神の國」の教説を試みたのも此の理由に基く。其は決して將來の希望ではない、現在すでに到達しつゝある事實である。神は彼と共に活生して其業をなし給ふ。神國の到來はまさに一糸の疑をいれぬ差迫つた事實である。耶蘇は天父の中に活き其のうちにて呼吸してゐる、彼の生活に於ける悉くが宗教である。故に彼の凡ての教は神を中心として出で、凡ての言は直ちに聽者の心をして神に向はしめる。如何

なる困難の時にも彼の最後の據り所避け所は神である。彼は絶えず神の聲に聞いた、絶えず天父に訴へた。彼の生活、彼の行爲、彼の言説、すべては此の標的に向つて走り、此の中心點から放射して居るのである。

耶蘇の神は靈的の人格的實在者である。「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞とをもて拜さ」ねばならぬ。彼は常に神と靈的に交通してゐた。彼によれば神殿に於てする犠牲祭などは決して神に接近する道でない。神は碎けたる魂を求めて供物を喜び給はないのである。また耶蘇の説きし神の國は此世の國ではなくして靈的の國である。神と其の事業に對する耶蘇の思想、方法、形式は悉く物質的ならずして精神的のものである。而して此の靈的存者在者なる神はまた偉大なる全能力を具備し給ふ人格者である。「父に於ては能はざる所なし」、一たび神意動けば此の山に移りて彼の海に入れと言ふもまた能ふのである。舊約に於て信ぜられたる全能の神、稜威の神はまた耶蘇の教へたる神である。而かも此の稜威雷の

\*ヨハネ傳  
四章廿四

°ヨハネ傳  
六十八章卅



如き神を和げて、無限の愛に富み給ふ天父と觀じたる所に、耶蘇獨特の神が現されて居る。耶蘇の教説、比喩談の多くは此の天父の愛を語つて居る。野に咲く花、空に飛ぶ鳥、悉く此の天父の美を示して居る。匆忙として絶えず危険と始終した三年の傳道生活に、猶ほ一脈平和の氣をたゞよはせたのは實に耶蘇の此の神觀によるのである。彼は此の神觀を常に弟子の心に注入する事に勉めた。是れ使徒パウロを始め多くの教徒が、如何なる迫害の下や悲惨なる境遇に在つても、感謝の生活を送るを以て基督教徒第一の徳となした所以である。蓋し神を天父と呼び奉るより大なる感謝の泉はないからである。

耶蘇は弟子に父なる神を説くと共に絶えず自己を説いた。前に述べた如く、彼は自己を神の獨子なりとし、萬民の贖のために遣はされたる救主なりと自覺した。「我は生命のパンなり、我に來る者は飢えず我を信する者は何時までも渴くことなからん。」我に就る者は死なず、我を受くるは父（神）を受くるなり。「我は道なり、眞理なり、生命なり、我に

由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。」「我を見し者は父を見しなり」と、凡そ斯く耶蘇自身を語りし語は列擧に追なきほど福音書に録されて居る。勿論福音書に録されたる全部を耶蘇の述べし言葉其まゝと信する事は出来ないが、福音記者が此種の語を數多く主耶蘇の語として記録したることは、偶ま耶蘇が弟子達に神と共に自己を多く説きし證左である。所詮、耶蘇の教説の凡ては、神と基督——天父と獨子なる二大中心點に歸一せられると言うて差支あるまい。

神と其の獨子を説いて、是の信仰を勧めたのが耶蘇の教説の眼目とすれば、他の道德的教訓などは抑も末である。耶蘇の教は倫理説として一の體系をなすものとは言へない。彼はまゝ人間道德の原則を示したが、些細なる道德實踐上の教は、寧ろ其場合に應じて必要な警告をなしたにとゞまる。彼は極力パリサイ的形式道德を排斥して至誠を以て萬事を貫き、精神的に神意を成し遂ぐべきことを説いた。敬神愛人は道德の根幹である。「神の國と



其義とを求む」るが人としての第一の義務である。「已れ人に爲られんと欲ふことを人に爲す」が人間相互の間に守らるべき道である。神と人との奉仕ふることが人間の正しき態度でなければならぬ。彼はパリサイ人を目して、人の誠(彼等の傳説)を守りて律法となすも、義と信と仁と其うちになしと云うて居る。「パリサイ人の義しきよりも汝等の義しきこと勝れずば天國に入る能はず」と弟子達を警告して居る。彼の「汝の敵を愛せよ」なる語も、パリサイ徒の何々す可からずとの誠律的な消極的道德に對して、積極的道德の原理を示したものと見るべきである。我が日本の道德思想に於て一の「まごころ」赤き心」が諸徳を實行する原動力である如く、耶蘇の教に於ても「聖靈汝らに萬の事を教へん、」一片の信仰心あらば爲すべき事は其時に臨めば自ら分明するのである。複雑なる倫理説や數多き徳目は第二義的のもので、其はパリサイ徒や儒教徒の説く所、我等の第一に重んずべき點は神の聖靈の流れ入るべき「信従の心」、神明と相通する「まごころ」である。細かき徳目の如き

ヨハネ傳  
十四章廿六

は必要に應じて之を採り學べば足るのである。

要之、耶蘇三年の宣教の中心題目は道德にあらずして永生にある。「人全世界を得るとも己が生命を失はゞ何の益あらん。」とは耶蘇所教の精神である。而して「永遠の生命は唯一の眞神と、其の遣はし給ひし耶蘇基督を知るにあり。」との一句は耶蘇所教の根本題目を遺憾なく道破した言葉である。

マタイ傳  
十六章廿六節

ヨハネ傳  
十七章三節



それ神の満足れる徳はことごとく  
かたちをなしてキリストに宿れり

(コロサイ書第二章九節)

### 本叢書の刊行に就いて

立教學院ミツシヨン・バムフレットは立教大學及立教中學校内に於て、福音を宣傳し基督の聖公會を擴張せむが爲に時々發刊する小叢書である。執筆は聖公會教徒なる立教學院ミツシヨン員之にあたり、學生を讀者層として、通俗に墮せず専門に走らざる手頃の讀物を提供せんとするにある。此種の出版物はたゞに立教學院内のみならず、一般讀書界にも要求するものなることを信じ、廉價を以て世に頒つ次第である。幸に本叢者が傳道堅信のために利用せられ、神國擴張の一助となるを得ば、唯だに執筆者の感謝のみに止らぬであらう。

- |     |                |                  |       |
|-----|----------------|------------------|-------|
| 第一篇 | 科學全盛時代の神       | 立教大學教授<br>神學博士   | 高松孝次著 |
| 第二篇 | 立教學院宗教運動の過去及現在 | 立教中學校附牧師<br>長老   | 前島潔著  |
| 第三篇 | 日本精精と基督教       | 立教大學教授<br>東洋大學教授 | 飯田堯一著 |
| 第四篇 | 耶穌基督           | 長老               | 前島潔著  |

各篇定價一部十五錢 郵税二錢(三錢郵券代用可)



昭和九年三月二十八日發行

【實價十五錢】

不許  
複製

著者 前島 潔

發行人 東京市豊島區池袋三丁目一、二七二  
立教學院ミツシヨウ

出版代表者 前島

東京市豊島區西巢鴨四丁目一二六

印刷人 澤田 文雄

販賣元

東京市麻布區  
材木町廿四番地

電話青山七八〇二  
振替東京四一七四〇

聖公會出版社

〔行印所刷印圖學〕



終

